

求道

第七卷
第九號



求道第七卷第九號目次

求道

◎朝家の御爲め國民のため念佛申すべし

講話

◎香光莊嚴

近角常觀

慶讃

◎君則、臣則

近角常觀

〔十七憲法第三條〕

告白

◎底抜けの懺悔

須藤堅正

自督

◎歳晩の感謝

〔不斷煩惱得涅槃〕

雜錄

◎信仰書簡六章

一月一日午前九時ヨリ

求道學舎

〔木郷區森川町一番地〕

一月七日午後二時ヨリ

第一 求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

一月八日午後六時

第二 求道會

〔日本橋彌生町説教所〕

求道

第七卷 第九號

朝家の御ため國民のため
に念佛申すべし

親鸞聖人御消息集に曰。『詮じさふらふところは、御身にか
ぎらず、念佛まふさん人々は、わが御身の料はまほしめさず
とも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまふしあはせ
まひさふらふは、めてたくさふらふべし。往生を不定におぼ
しめさん人々は、まづわが身の往生をおぼしめして念佛さふ
らふべし、わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御
恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念佛こゝろにいて、
まふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべ
しとぞおぼえさふらふ。よくよく御案さふらふべし。このほ
かは別の御はからひあるべしとおぼえさふらふ』と是實
に信仰の上より湧き出づる聖人が至誠の衷情にして朝家國民
の爲に世にくせ事なかれがし、世の中安穩なれ、佛法弘まれ

との思より感謝報恩の念佛を捧げよとの仰せてある、古來よ
り眞宗信者が俗諺門を説くときに常に引用する御文である、
されど朝家の御ため國民のためといふ文字に重きを置いたため
に、動もすれば念佛申しあはせたまひさふらふはめてたく
さふらふべしの文字に注意を拂はぬやふである、時としては
徒らに其當時の思想に順應し、世間の風潮に附加して肝腎の
念佛の文字を閉却してはならぬ、言ひ換へたならば一たび信
心を獲得したもならば其信心の上より世の中安穩なれ、佛
法弘まれかし、どうか此信心の恵、念佛の力の普ねさやうと
報恩のために念佛申せよとの仰せてある、全體此御消息を書
かれたるときは、聖人御歸洛の後鎌倉へ讒訴するものありて
性信房始め御弟子方が注問所に出て、辨疏したとき、性信房
へ下されたる御手紙である、故に其思召は苟も念佛を稱へん
ものはたとひ念佛を誹り悪むものありと雖、此方よりは誹り
悪むべからず、却て憐れみをかくべし、嘗て大師聖人の御時
念佛を停止せられしかば、世にくせ事の起りしかば、夫につ
けても念佛をふかくたのみて、世のいのりにこゝろをいれ
て、まふしあはせたまふべしと覺を候、かくの如く念佛を停
止せられたるがために世にくせ事が起りたるゆへに、くせ事

の起らぬやうにと却て念佛せよとの仰せである、かくの如き深き意味にて念佛せよと仰せらるゝのである、和讃に曰く、山家の傳教大師は、國土人民をあほれみで、七難消滅の誦文には南無阿彌陀佛をとまふべし、一たび信心を獲得したる已上はどうか此佛陀の惠の普ねからまし。世の中安穩なれかしと念佛して報恩の至誠を捧ぐべきである。

此の如く報恩の衷情の湧き出づる根本は信仰であることを忘れてはならぬ、否若し信仰がなかつたならば朝家の御ため、國民のためといふたところで畢竟律法的に押しつけるに過ぎないことになる、世の中安穩なれ、佛法ひろまれといふたところて畢竟現世祈禱になりてしまふ、さればこそ上の御消息を熟讀すべし、『念佛まふさん人々はわが御身の料はまほしめさずとも朝家の御ため國民のために念佛をまふしあはせたまひさふらふはめてたくさふらふべし』とある、念佛まふさん人々はといふは信心獲得の人である、わが御身の料はまほしめさずともといふは既に安心決得して、往生一定となりたる上のことである、夫故に次の文に『往生を不定におぼしめさん人はまづわが身の往生をまほしめして御念佛さふらふべし、わが御身の往生一定とおぼしめさん人は佛の御恩をまほ

嗚呼我等如來の大悲に遇はずんば、自己の根本的罪惡を自覺することが出来ぬであらう、我等が罪惡を自覺せずんば我等強剛難化の項を折りて貰ふことは出来ぬであらう、抑々平和を破るの禍根は畢竟我慢の頭が下がらぬからである、如來の大悲は能く憍慢の鎧を破りて下さるのである、此に於て上下の秩序も起り、君臣の分天地の下如く明らかにしてあらゆる恩徳を自覺することを得るのである、經に曰く、佛の遊履したまふ所、國邑丘聚化を蒙らざる靡し、天下和順にして日月清明なり、風雨時を以てして災厲起らず、國豊かに民安し、兵戈用ふることなし、徳を崇め仁を興し、務めて禮讓を修すと是國民舉て皆五惡を自覺して大悲の恩徳に感泣したる結果である、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれかし、朝家の御ため、國民のため念佛をまふしあはせたまひ候はゞ目出度候べし、南無阿彌陀佛。

しめさんに御報恩のために御念佛をまふにれまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとをまほしめさふらふ』とある、是最も注意すべき點である、往生不定では何より信心決得することが急務である、此信心の源泉なくんば報恩の流は來らぬのである、歎異鈔に親鸞は父母孝養のためにとて一遍にても念佛まふしたることいまだ候はずといふは、實に此信心を本とすべきことを申されたのである、世間道徳と信仰との間に相對的に褒貶を試みたるやうに誤解してはならぬ、信仰は世間を超絶したる絶對の光である、世間を超絶したればこそ世間の上に光を持來し得るのである、故に佛の御恩をまほしめさんに御報恩のために御念佛をまふにれまふして世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとあるのである、故に信仰の一念に國王の恩、父母の恩、衆生の恩今一時に知らして貰ふのである、信仰なくして俗諦門を行はしめんとするは、律法主義に陥りて其實行の原動力がない、抑々現時動もすれば國家民人の秩序の觀念の乏しき者を生ずるは畢竟此堅實なる信仰の缺如するより生ずるのである、茲に至りて益々聖人御消息の眞精神の發揮せらるゝことの愈々切なるを感じる次第である。

如來爲一切常作慈父母。當知諸衆生。皆是如來子。世尊大慈悲。爲衆修苦行。如人著鬼魅。狂亂多所爲。我今得見佛。所得三業善。願以此功德。廻向無上道。我今所供養。佛法及衆僧。願以此功德。三寶常在世。我今所當獲。種種諸功德。願以此破壞。衆生四種魔。我過惡知識。造作三世罪。今於佛前悔。願後更莫造。願諸衆生等。悉發菩提心。繫心常思念。十方一切佛。復願諸衆生。永破諸煩惱。了了見佛性。猶如妙德等。

(涅槃經、阿闍世王懺悔偈)

香光莊嚴

(求道學舎日曜講話)

近角常觀

今日の題は「香光莊嚴」であります。香は「にほひ」、光は「ひかり」、莊嚴は「かざり」である。之は御存知の如く「和讃」の中にも、

染香人のその身には、
香氣あるがごとくなり、
これをすなはちなづけしてぞ
香光莊嚴とまふすなる。

染香人は香に染まる人である。其の「染香人の其の身には香氣あるが如くなり、之をすなはち名けてぞ、香光莊嚴とまふすなる」である。之は念佛を稱へる人の身には尊き佛の恵みの香ひが身に染み込んである。故に其の染香人の其の身には、恵みの香氣がある如くである。其の念佛喜ぶ人の事を香光莊嚴と言ふといふ御示してある。

さて今日此の事を話するは何か。つまり法然聖人のお勧め下さる南無阿彌陀佛の念佛は、如來の廣大な恵み其の儘をお傳へ下さる念佛で、此の法然聖人の教へを親鸞聖人がお頂き下され、其の親鸞聖人の御信心一つを我々も頂いて、同様

も、其の念佛喜ぶ身になつた心持は、眞に佛の境界に一點の疑ひも無く、心中何一つ分らぬ事は無い。眞に佛の廣大な智慧を頂いて、人生凡夫の小さな力では何一つ出来ぬ事が心底より皆分り来り、眞に佛のお恵み一つが難有いと、之を通り抜けたと言はんか、廣大勝解と言はんか、其の廣大な智慧を知らせて下さる念佛故、智慧の念佛である。次の「和讃」には又

釋迦彌陀の慈悲よりぞ、
願作佛心はえしめける、
信心に智慧にいらてこそ、
佛恩報ずる身とはなれ。
智慧の念佛うることは、
法藏願力のなせるなり、
信心の智慧なかりせば、
いかてか涅槃をさとらまし。
斯くの如くどの和讃を見ても、皆な智慧々々とお示し下されてあるのである。

其處で際を立て、申しまするに、此のやうな事は茲にお集りの皆様には言ふ必用も無いやうでありますけれども、動もすると今世の人は思ふのである。他力の教は情の教であつて佛に對して満身の情を注ぎて難有く思ふ教であると思ふ人があるのである。又佛の慈悲を頂くといふのも、慈悲は情故、佛の情を難有く頂く宗教であると言ふ人もあるのである。成程一應は最もて、佛の慈悲といふも佛の情けであり、我々が喜ぶといふも、其の喜びは我々の情の上に来る事故、然ういふ風に言ふのも無理は無いのである。去りながら此の信仰上に来る、此の慈悲、喜びは此の凡夫の妄情の上で言ふ所の情、世間の心理學上などといふ情、感情、なまげ、などいふものと一つであると思ふたら大間違ひである。若し之を情とい

に佛の恵みを喜び念佛させて貰ふばかりである。即ち此の信心一つを頂くにより我々も此の佛の恵みをば頂く染香人の身にならせて貰ふ。恐れ多けれども此の罪惡の私が染香人とて佛の恵みの染み渡つた身分にならせて貰ひ、香光莊嚴の尊き仕合せを、此の煩惱の私が得させて貰ふ事が出来るのである。

話が段々廣くなりますが、抑々法然聖人の御説き下さる念佛は、一寸考へると唯徒に口に稱名する念佛のように頂けるけれども、然うて無い。親鸞聖人の御言葉で頂けば「正像未和讃」の中には

無碍光佛のみことには、
未來の有情利せんとて、
大勢至菩薩に、
智慧の念佛さづけしむ。

濁世の有情をあはれみて、
勢至念佛すゝめしむ、
信心のひとを攝取して、
淨土に歸入せしめけり。

とある。此の和讃は其の意は偏に大勢至菩薩の化現として法然聖人の事をお喜びなされたのであつて、「無碍光佛のみことには、未來の有情利せんとて、大勢至菩薩に、智慧の念佛授けしむ」——法然聖人の御勧め下さる念佛は智慧の念佛である。智慧の念佛とは、此の念佛一つにより佛の眞實の智慧が頂ける。著しく言へば此の念佛一つが頂けると、佛の絶對の眞の智慧を賜はるにより、其の念佛一つを頂くが智慧の念佛である。殊に際立て、言ふならば、此の念佛一つを頂くと、人生は右より左より、前より後より、通曉せざる無しといふ眞に通じ抜けたる眞實の智慧の境に入る事が出来るのである。此の念佛を頂くといふと、道理理屈が有るては無けれど

ふならば、此の情は絶對の情とも言う可きて、眞に此の私を十劫以來待ち兼ねて居て下さる親様に遇ひ、眞に心底より起り来る喜びなれば、世間で言ふ情、なまげ、喜び、慈悲などいふものとは大違ひである。眞に大悲の親様に遇ひ、親の御心を頂いて見ると、此の如來大悲の恵みなければ人生は全くの闇みである。然るに此の佛の恵みある爲めに、此の罪惡の私が見捨てられぬかと、眞に心に佛の眞實心が頂けた一念は、成程喜びには違はぬも、其の喜びは、唯嬉しい喜ばしいと、世間の言葉で形容出来るやうな小さな事柄では無い。實に自分の心中に南無阿彌陀佛の廣大な親様を知らせて貰うた喜びは、成程喜びは喜びに違はぬも、夫れと共に明に人生の事残り無く心に分つて来るやうになり若し之を人生的に情であると言ふならば、又一方に智慧であると言はうか、意志であると言はうか、其の智慧も道理理屈の智慧で無く、所謂無分別智の廣大な智慧を頂き、眼前に事物を見る以上に明かなる佛の恵みを喜ばせて貰ふ事が出来るのである。其の廣大の智慧の慈悲を頂くのである。其處になりて其の廣大な智慧を頂き、心中一點の疑ひも無く、一點の滞りも無くなつた心持は、之を何と言はうか、南無阿彌陀佛が智慧の念佛であると言はうか、智慧の信心であると言はうか、茲で頂くと南無阿彌陀佛は全く智慧の念佛である。

て法然聖人一代の化導は、此の智慧の念佛を知らせて下されたが、法然聖人一代の教化である。夫も猶ほぶつつけに親鸞聖人の思召を言ふならば、抑々法然聖人が日本に顯はれ、此の彌陀の本願念佛の教をお説き下されたは何であるか。直き

佛の智慧の姿、大勢至菩薩が此世に來りて佛の智慧をお説き下されたのである。法然聖人直しくが、大勢至菩薩が此の智慧の念佛を自分に知らせる爲めに、佛の境界より來り現はれて下された御姿で、其の法然聖人がお説き下される廣大なる智慧の念佛、南無阿彌陀佛、撰擇本願の教は、眞に人生に於て我々の頂く可き智慧の燈炬、眞に我々をお救ひ下さる唯一の船筏であると、お頂きなされたのである。夫て上來言ふ『正像末和讃』の續きには、聖覺法印の御言葉、而も聖覺法印が法然聖人の事をお喜びなされたお言葉を和讃にお作りなされて、

無明長夜の燈炬なり、 智眼くらしとかなしむな、
生死大海の船筏なり、 罪障ちもしとなげかされ。

南無阿彌陀佛は此の人生無明長夜の燈であるぞ、松灯であるぞと、之が法然聖人の御教化である。夫故「智眼くらしと悲しむな」智慧の眼が暗いと悲むには及ばぬぞとの御示してある。「生死大海の船筏なり」生死の苦しみの大海、涯無く行きどなき大海に、南無阿彌陀佛一つは我々を乗せて下せる船筏である。夫故「罪障重しと歎げかれ」である。之は聖覺法印が法然聖人の恩徳を讃歎する爲めに書かれた讃文である。夫れを斯く親鸞聖人が和讃にお作りなされたのである。次ぎに在るのが同じく聖覺法師の『唯信鈔』の御言葉にお寄りなされたのである。

願力無窮にましますば、 罪業深重もちもからず、
佛智無邊にましますば、 散亂放逸もすてられず。
願力無窮にまします故、我々罪の重きを重しとせぬ。佛の

れた時、法然聖人が「選擇本願念佛集」といふ此の内題の字と、及び此の南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」と釋の純空と、を書きとお渡しなされた。所謂『選擇集』御附屬の事である。親鸞聖人は『教行信證』の畢りに此の事をお喜びなされて、然るに愚禿釋の鸞、建仁辛酉の曆難行を棄て、本願に歸す。元久乙の丑歲、恩恕を蒙りて選擇を書く、同じき年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の内題の字、並に南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と、釋の純空の字と空の眞筆を以て之を書かしたまひき（中略）選擇本願念佛集は、禪定博陸（月輪殿兼實法名圖照）之教命に依て選集せしむる所なり。眞宗の簡要念佛の奥義斯に攝在せり。見る者論し易し。誠に是れ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。年を涉り日を涉り、其の教誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ疎と云ひ、此の見寫を獲るの徒甚だ以て難し。爾るに既に製作を書寫し眞影を圖畫せり。是れ專念正業の徳なり。是れ決定往生の徴なり。仍て悲喜の涙を抑て由來の縁を註す。

と仰せられてある。之は何かといふに、『選擇集』一部の全體の骨目は、此の選擇本願念佛集といふ題號と、南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の一句に盡されてある。之を法然聖人も書きお渡しなされ、又親鸞聖人も頂きてお喜びなされたことよ茲に言ふに言へぬ味ひがあるのであり。

其處で今更繰反すも度び重なる事でありませうけれど、此の

智慧極まりなきが故に、我々散亂放逸の者が捨てられぬ。といふ御示してある。上來言ふ『和讃』は凡て皆な法然聖人の教へを喜びてお作りなされたのである。親鸞聖人は斯くの如く度々、法然聖人の御恩を喜んでお出なさるのであります。而して此等の『和讃』の一番初めに在るが、法然聖人の御教化其まゝをお知らせ下されたのであります。曰く

五濁惡世の有情の、 選擇本願信すれば、
不可稱不可説不可思議の、 功德は行者の身にみたり。

「五濁惡世の有情、の選擇本願信すれば」——五濁惡世の罪深き私共が、選擇本願南無阿彌陀佛一つを信すればである。「不可稱不可説不可思議の、功德は行者の身にみたり」——其の我々罪深き衆生を飽迄見捨てぬとある選擇本願南無阿彌陀佛一つを信すれば、不可稱不可説不可思議——口にも何とも言へぬ稱す可らず、説く可らず、思議す可からずの廣大の功德が、身に充ち満ちて下さる、と斯くあるのであります。

其處で此の廣大の法然聖人御教化の趣きを、度び重なるけれども、又何時もの如く、親鸞聖人の頂き給へる御教化の上から話さうと思ふのである。其處で親鸞聖人のお頂きなされたは何をお頂きなされたのであるか。選擇本願念佛南無阿彌陀佛といふ此外には無いのである。先日来各所で報恩講が勤まり、到る處で御縁に遇はさせて貰ひ喜ばせて貰うた事であり、ますが、親鸞聖人が法然聖人より教を御聴きなされたは、何を御聞きなされたのであるか。選擇本願念佛南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」といふ此の外には無いのである。即ち親鸞聖人が法然聖人より『選擇集』を授かり、之をお寫しなされ

味ひは非常に有難い事故申しますならば、選擇本願念佛、選擇といふは常に申す如く、善きものを選び悪しきものを捨てるが選擇の意味である。此選擇の意味合ひを一々細かに申しますならば澤山ある。けれども要點は何であるか。抑佛が我々を淨土に往生させる爲に、何を以て我々を救はんかと、澤山なる諸佛淨土の中より往生の行をお選みなされた。其の時に、或は忍辱精進智慧禪定等の六度の行を以て往生の行とする淨土もある。或は孝養父母奉事師長等の行を以て往生の行とするの佛土もある。或は只念佛を稱するを以て往生の行とするの淨土もある。けれども佛が我々凡夫の心を見なす時に、我々罪惡の者は戒行を持たせて助くる事も出来ねば、修行をさせて救ひ取る事も出来ぬ。學問を窮めて到達する事も出来ぬば、孝養父母奉事師長が眞に出来るかといふに、夫も出来ぬのである。一切の行法、我々の力に叶ふものは一つも無いのである。——他力の味ひは茲に氣が附かぬと出て來ぬのであります。

先日来多くの方に御縁を結び、多くの方がお喜び下された。其の多くの方が私の話をお聞き下されて、私の話を有難いとお聞き下された人よりも、餘りにひどい無情な事を言ふ如何にもひどいと、一旦は自分の心に怒りを抱く迄にお考へ下された人か多いのである。さて然らば思つて見るもの、さて考へて見ると成る程自分が悪いに違ひは無い。如何にも自分の思ふ處は間違ひであつたと、斯く氣附かれた時が、向ふに佛のお恵みが顯はれて下された時であつたのである。猶ほ申すならば、抑も人間は何んと平日思つて居るのであるか。

自分は何事も善く出来る。事も皆な何相應に立派にやつて居る。自分は努めて善くして居ると、口にこそ言はね誰も皆然う思ふて居るのである。勿論座禪や戒行が残らず出来る迄は誰も思はぬも、心中には我が心正しと思ひ、我が行ひ善しと思ふ思ひが誰しも皆な心底にはあるのである。問題は茲である。我々は正しいと思ふて居るのであるが、果して自分は正しいのであるか何うか。我々心が亂れぬと言ふて居るのであるが、果して心が亂れぬのであるか何うか。抑々人生の問題に手を着く可きは茲である。若し今迄自分は間違ひが無いと力み、『所謂自分の廓に立て籠つて居る人が、何處か一點でも碎け出したら大騒動である。今迄、自分は正しい、自分はもう之でよいと決め込み、自から城廓に立て籠つて居た人がさて自分は正しいと思ふて居たけれども、何うも本當に正しいのては無つた、之れは仕て見やうが無いと、一點何處からでも落城すると、さあ大變である。之も正しくなかつた、あれで力んで居たけれどもあれも頼みにならぬと、段々に一つ宛いけなくなり、遂には凡ての事がいかぬやうにあるのである。

處が人間は誰しも必ず一旦は其處に行く可き運命を持つて居るのである。或は若くて丈夫だつた者が、病氣で其處に突き當るか、或は人生の不如意に苦しんで其處に行くか、或は人との關係に苦しんで其處に突き當るか、又は信仰の問題で突き當るか。兎に角何處から突き當るに人間は決つて居るのである。茲である、選擇本願の大もとと茲に在るのであります佛が兼ねて此の私を知ろし召し下されて、其のやうな色

遣る瀬無き佛の御心、夫れが直ちに本願である。

其處で此の南無阿彌陀佛を教へ下された御方が智慧の法然聖人、——勿論法然聖人が御自分の力で此の事をお知りなされたのては無い。佛が直き——法然聖人と現はれ下されたに違はぬが、唯口に稱へる唯の念佛ならば夫れ以前にも日本に澤山あつたのである。けれども此念佛は、唯一應の戒行修行と同じやうに、唯口に稱へて殊勝がる念佛では無い。此の何れ行も絶え果てた者を救はうとの念佛である。此の何れの道も及ばぬ者を、助けようとの呼び聲である。開みを照らさうとの燈なのである。若し此の念佛なかりせば、八萬四千の教法はあつても我々には皆な駄目、一つも行ふ事は出来ぬ。如何なる道ありても、我々が身の爲めには一つもならぬのである。其の何れの行も及ばぬ仕て見様なき私、其の者を救はうとの遣る瀬無き佛の御意の其の儘が南無阿彌陀佛。夫れに何の理屈があるか知らねども、八萬四千の教法も、六度萬行の廣大な功德も、皆此の南無阿彌陀佛の中に籠つてある。而して此の南無阿彌陀佛一つを以て救はうと、遣る瀬無き大悲の御心より選擇攝取して下された此の南無阿彌陀佛であると頂いて見れば、選擇本願南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本、此の南無阿彌陀佛以外には何物も最早や入らぬのである。

先月の『求道』にも書いて置いたのであります、『救異鈔』の第二章は、つまり茲の味ひを指示し下されたのである。念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくくおぼしめしておはしましたは、んべらんは、大きなあやまりなり。云云。

々の事、皆な自分で立派にやつて行けるならば、修行や戒行や六度の行や、乃至孝養父母奉事師長等、捨て、下さるには及ばぬ。夫れ等では連も此の惡業生には駄目と見て下された故、之では到底凡夫が助からぬ、行ふ事が出来ぬ。其の斯くの如き何れの行も及ばぬ者を救ひ度い、といふ茲が阿彌陀佛選擇本願の眼目である。世間には色々立派な教が澤山ある。けれども、五濁惡世の我等には行へぬ。五濁惡世の有情の、選擇本願信ずれば——抑々親鸞聖人が法然聖人にお聞きなされたは、此の選擇本願の南無阿彌陀佛一つであつたのである。南無阿彌陀佛は法然聖人平日の御教化が、此の南無阿彌陀佛の外に無かつた事故、三百八十餘人の御門弟、一人も此の南無阿彌陀佛を知らぬ人は無い。けれども「五濁惡世の有情の、選擇本願信ずれば」をお頂きなされたは親鸞聖人御一人であつたのである。此の選擇本願の南無阿彌陀佛とは、佛何故に此の念佛一つをお選び下されたのであるか。我々外の事が出来る位なら、選びはして下さらぬ。外の事は何を言ふても皆な行へぬ、駄目である。出来ると思ふて居るが、皆出来ぬのぢやぞよ、其の出来ぬ其の者を救うてやるのぢやぞよと、此の遣る瀬無き佛の御ま心より、此の凡ての者に頂かせ下さる所の南無阿彌陀佛である。南無阿彌陀佛ならば、如何な五逆十惡の者でも稱へられる、之ならば如何な罪惡の者でも必ず救はれると、佛の方より此方の機根を見抜かせられて佛より選擇本願の南無阿彌陀佛なのである。言ひ換へれば、佛の選擇本願が即ち此の南無阿彌陀佛なのである。此の南無阿彌陀佛をこそ、此の念佛を與へて衆生を救はんある其の

即ち今の「往生之業念佛爲本」である。「往生之業念佛爲本」であれば、此の念佛以外他の事で我々助かる道は無いのである。外に何かと思ふなら、大きな間違ひなのである。又親鸞にあきては、たゞ念佛して彌陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり。云々。

三

さて之迄は法然聖人より親鸞聖人へ御附屬の「選擇集」の御文で申したのであります。猶ほ今一つ法然聖人より親鸞聖人へ直き——御附屬の御文がある。夫れは法然聖人が直き——御自身のお姿の上に、讃をして親鸞聖人に御渡しなされた御文である。前と同じく「教行信證」化身上卷末には宣は

同じき日空の眞影申預かり圖畫し奉る。同じき二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は眞筆を以て、南無阿彌陀佛と、若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺。彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生の眞文と書かしたまふ。又夢の告に依て縛空の字を改めて、同じき日御筆を以て名の字を書かしたまひ畢りぬ。云々。初めに南無阿彌陀佛と置いて「若し我成佛せんに、十方の衆生我が名號を稱して下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らず。彼の佛今現に成佛したまへり。當に知るべし。本誓重

願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」と。——之は善導大師『禮讚』の文である。之は何か。佛が第一に願を立て下されて、十方の衆生を觀をなはし仰しやつて下さるには「若し我成佛せんに、十方の衆生、我が名號を稱して下十聲に至らん」といふは先き程以來言ふが茲である。茲に唯「我が名號を稱して」とある丈けて、戒とも無ければ行とも無く善とも無い。唯我が名を稱へたとある丈けてである。外の事出来る位なら然うは仰しやつて下さらぬ。戒も行も出来ぬ者、一生惡の止められぬ其の者と云つて下さるのである。『和讃』に

一形惡をつくれども、
つねに念佛せしむれば
諸障自然にのぞりぬ。

縱令一生造惡の、

衆生引接のためにとて、

稱我名字と願じつゝ、

若不生者とちかひたり。

一代惡をする我々である。斯く一代惡をする罪業の私の爲め其の者を救うためとて、お立て下された本願である。夫れ故外の事は一つも仰しやらぬ。唯「十方の衆生我が名號を稱して」である。茲が選擇本願の有難い處である。茲の處をよく頂かねばならぬ。而して茲の御意が能く頂けて「若し我成佛せんに十方の衆生我が名號を稱して下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らず、あゝ如何にも有難い南無阿彌陀佛であると、南無阿彌陀佛々々と口に念佛稱へる心の起つた時が初めての一聲である。而して一聲二聲乃至十聲、乃至一代稱へる者を「若し生れずば正覺を取らず」、然ういふ十方の衆生我が名號を稱する者を必ず我が淨土に生れさせねば措かぬと

も間違ひなるぞ。然ういふ者であるもの故に、其の者を救はんといふ遣る瀬無き佛の思召が本願、其の本願を届けずば措かぬといふのが佛のお誓ひ、其のお誓ひが斯く出来上りて下されてある上は、本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」斯く頂くの外は無いぞと示し下されたのである、さて斯くの如く頂いて見ると、斯く迄深き佛の思召であつたか、斯く迄不可思議の如來の御慈悲であつたかと、佛の本誓重願を其の儘頂くの外は無い。之が「親鸞に於きては唯念佛して阿彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」と頂いた味ひである。信ぜんと欲して信ずるのでは無い。佛の遣る瀬無き、斯程迄の本誓重願と聞かせて貰へば、信ぜず居られなくなるのが「本誓重願虚しからず」である。

さて斯く頂くと、如來の廣大な選擇本願を我々信ぜざらんとしても信ぜずには居られぬ。「五濁惡世の有情の、選擇本願信ずれば、不可稱不可説不可思議の、功徳は行者の身にえてり」——あゝ實に有難い、何たる大悲のお心か。私共の口にも言葉にも言へぬ廣大の思召故に、此の五濁惡世の我々が、其の選擇本願承はれば、不可稱不可思議の功徳が、我々の全身に充ち満ちて下さる。『歎異鈔』の

彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつ心のおこるときすなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

と示し下さるが茲である。「彌陀の誓願不思議を信じて」とは、上來言ふ所の選擇本願の親心の深きを頂き、此の私の爲

お誓ひ下されたのである。而して斯く誓はせられた彼の佛は「現任今に成佛したまへり」斯く若し生れずば正覺を取らぬと誓ひ下された彼の佛は、今現在に成佛して南無阿彌陀佛となり十劫以來現はれて居て下されてある。故に「當に知るべし本誓重願虚しからず」——其の廣大な十方衆生を呼びかけ下されてある佛が、既に成佛して下されてある上は最早や疑念にも疑ふに及ばぬ。正覺を取らぬと誓ひ下された佛が既に正覺を取つてお出下さるから「當に知るべし」である。「本誓重願虚しからず」——其の佛の廣大な誓ひの願は決して虚しくはならぬ、斯く十方衆生に向ひお誓ひ下された其の佛は、今現に成佛して我々を待つて居て下さるのである。斯く五濁惡世の罪の衆生——殊に戒も出来ねば行も出来ぬ、所謂散亂心の我々、正義といふも正義が本當に分るても無く、善といふも、善が本當に分るても無い。人生當てにして居る身體、健康、財産、親子兄弟、何一つ當てにならぬ。其の當てにならぬ人生に向ひ、此の南無阿彌陀佛と名乗りを揚げ、凡ての者を助ける爲めに立て下された佛の本願。其の本願は「若し我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺」とお誓ひ下された阿彌陀佛。其の阿彌陀佛の御名前が南無阿彌陀佛。其の佛が今現に成佛して下されてあるのである。すれば其の廣大な、十方衆生救はずば佛にならぬと誓はせられた其の佛が、佛と成りて下されてある上は、其の佛の遣る瀬無き御心から、此の淺間しき罪惡の私を御覽下され、其の罪の汝を哀れむと言つて下さるのが、其の佛の本願であるぞ。すれば自づから善いと思ふも間違ひなれば善が出来ぬと悲しむ

めに斯くも御苦勞下されたのであるかと信ずる。之が彌陀の誓願不思議を信じて、念佛申さんと思ひ立つ心の起る時即ち攝取不捨の利益に預けしめ給ふなりである。

兎角人が信仰に入り告白をせられると、其の喜ばれる結果ばかりを見るもの故に、自分もあゝなり度い、あゝなりてこそ本當と、人の頂かれたあとの方の満足の有様ばかり好もしが、肝腎の頂く頂き心地、其人の頂かれた其の物、頂く佛の思召の方を聞かせて貰ふ事が六かしい。成る程信仰に氣がつくと満足故、嬉しくしてならぬ。とうとう眞實のお慈悲が届き下されたが、仕てやつたりといふ思ひあるも、夫れは信仰を頂いた結果の方である。夫れよりも肝腎は、夫程の思召が私の心に届いて下さる其の一念の所が肝腎である。此の一念の所を能く頂かねばならぬ。其の一念は此方から力んで頂かうとする一念では無いぞ。眞の一念の難有きは何處かといふに、斯くの如き五濁時惡世界の我々、何一つ善き事は出来ぬ——も一つ言ふならば、善き事出来ぬとも知らずに居る否な出来ぬものを出来ると思ひ、形ばかりでやりつゝ、一ツ角出来た積りて居り、本當は眞實のものとは一つも無き私を、其のように善き事出来る汝では無いぞ、出来ると思つて居るのが間違ひぢやぞ。其の罪深き其の者を助くるのであるぞ。外の事の出来る位なら何を苦しんで南無阿彌陀佛の本願を立てようぞ、

阿彌陀如來の仰せられけるようは、末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪はいかほど深くとも我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと仰せられたり。(御文)

と向ふから宣告して下さる。其の呼びかけ給ふ聲で、初めてあゝ五濁惡世の我等であつたかと、本願が頂かせて貰へるのである。佛が兼ねて五濁惡世の有情と呼びかけ下され、「我が名號を稱して下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らず」と、斯くの如き者に此の親の名前を知らせ、一念有難いと頂く所に皆助けずば措かぬといふ親切であると承はり、而して斯くお誓ひ下された佛は今現在に成佛して下されてある上は「本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」、此の本願は空しくは無いと、氣の附いた一念、夫れが信である。「阿彌陀如來の仰せられるようは……我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと仰せられたり」。其の佛の仰せを聞き、其の親心を聞き、其の南無阿彌陀佛の名前を聞き、其の願を聞き、其のお誓ひを聞き、あゝ有難いと頂く一念が信、其の一念に「親鸞に於きては唯念佛して彌陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」——たつた一言なれども實に有難い。「唯念佛して」の「唯」の一言が有難いのである。外の事出来なれば「唯」では無い。外の事は皆な駄目、唯念佛と言つて下さるのである。のである。凡ての萬善善行出来ぬ其者を助ける、といふ慈悲が此の「唯」の一字に在るのである。と善き人法然聖人の仰せを蒙り、信ずる外に別の仔細なきなりである。其の信の一念に何うなるのであるか。「彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生をは遂ぐるなりと信じて、念佛まうさんと思ひたつ心の起る時、即ち攝取不捨の利益には預けしめ給なり」——其の一念が既に攝取不捨の光明中なのである。故に既に南無

阿彌陀佛々々と口に念佛起る其の時は、「衆生稱念必得往生」と、既に其の時往生決定の身にして頂いて居るのである。

猶ほ『歎異鈔』第二章には續けて、

念佛はまことに淨土にむさるゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。

茲が又甚だ肝要である。其の念佛には如何なる譯がある事やら、不可稱不可説不可思議て我々凡夫に分る事て無い。唯「念佛して彌陀に助けられ参らすべし」と、あなたの其仰せを頂く所が有難いのである。念佛は此の私を救はんと其慈悲の親様の御名乗りなのである。其の御名乗りを頂いて、あゝ有難いと頂く一念、其の時口に顯はれて下される念佛が淨土の種になるが、地獄の業になるが、夫れは我々凡夫にはわからぬ。唯彌陀に助けられて頂く茲一つである。汝が助けられるといふは何か、と言はれた處が外に言つて見やうは無い。次にたといふ法然聖人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりともさらば後悔すべからずさふらふ。そのゆゑは、自餘の行をはけみて佛になるべかりける身が念佛して地獄にもちてさふらはじこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはぬ。いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

茲に「何れの行も及び難き身なれば地獄は必定すみかぞかし」とあるが選擇本願の頂けた味ひである。何れの行も及びぬ地獄必定の身と眞に知らせて貰ふたのが、親のお慈悲が届

いて下され、唯南無阿彌陀佛ばかりと頂かせて貰へた有様である、もう茲になると、設ひ人が虚偽と言ほうが、欺かれて居ると言はうが、此の南無阿彌陀佛の外は無い。我が身は何れの行も及びぬ地獄必定の身、其の及びぬ者を救ふとの本願の儘が此の南無阿彌陀佛と斯く頂かせて貰ふの外は無いのである。次に

彌陀の本願まことにまはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにまはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせをらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歎。云云。先き程の「本誓重願虚しからず」の御文が丁度茲に當るのである。彌陀の本願の儘が釋尊の説教、釋尊の仰せの儘が善導大師の御教化、善導大師の儘が法然聖人の仰せ、法然聖人の儘が親鸞聖人の信仰である。すれば法然聖人の教へ給ふ南無阿彌陀佛の御教化は、彌陀の本願直さく、佛の本願の儘の御教である。是れひとへに此の私に此の廣大のお慈悲を知せよう爲め、大勢至菩薩が佛のみ許より現はせて下されたのが、法然聖人の御教化であると、斯く頂かせ貰ふ外は無いのであります。

四

さて斯くの如く頂くと、先程より言ふ『歎異鈔』の御教化、『選擇集』附屬の文の思召等皆な一つ所に來るのである。其處で近頃皆さんが如何にも喜んで下さる事故、今一度茲て拜讀

せんとするのは、親鸞聖人「西方指南鈔」の御言葉である。此の『西方指南鈔』は、法然聖人の御教化を親鸞聖人が、聞くが儘にお記し下されたもので、而も今讀む所は、先程より言ふ親鸞聖人が法然聖人より御附屬を御受けなされたお姿の上の讀文——「若我成佛十方衆生——衆生稱念必得往生」の文のお意を指示下された、殊に有難き御文であります。曰く

問。本願と本誓とその差別いかんぞ。

先程よりは佛の遺る瀬無き本願と、お誓いと、其の差別如何といふのである。

答。我成佛の時の名を稱せん衆生を生ぜしめんと云は本願也。もしむまれまじくば佛にならじと云は本誓也。我れ成佛の時、十方衆生に我が南無阿彌陀佛の名を稱へさせ、悉く我が淨土に生れさせ度い、といふが本願である。又此の遺る瀬無き我が心が届かずして、衆生が生れなんだら、我も正覺を取らぬ、といふ之が佛の本誓である。といふお示である。故に佛の廣大な思召の程は何うかと言ひますに、阿彌陀佛は自分が阿彌陀佛と姿を現はし、南無阿彌陀佛と名を現はし、其の名を十方衆生に稱へさせて、若し生れずば正覺を取らないといふが阿彌陀佛の御親心である。言ひ換へれば、我れ阿彌陀佛と成り、正覺の佛と現はれたる上は、必ず我が名を有りとする十方衆生に届かせ、必ず淨土に生れさせねば措かぬ、若し然らざる事が出来ぬなら我も阿彌陀と名乗るまい、即ち言ひ換へれば、我れ阿彌陀佛とある上は、必ず然らさせねば措かぬ、といふが、阿彌陀佛である。之が「淨土論」に在る「不虛作住持」の文のお意である。其の文は曰く、

佛の本願力を觀をなほすに、遇て空しく過る者無し。能く速に功德の大寶海を満足せしむ。

先き程より言ふ「五濁惡世の有情の」の和讃も同じ意味である。如來の本願力が觀をなほして下されてある上は、此の本願にもう遇ふ者は、一人も空しく過ぐる者は無い。能く速に功德の大寶海を満足せしむ。如何なる者も功德大寶海を満足せしめ下さる、といふのである。茲は一寸「淨土論」の文を拜讀すると、

言ふ所の不虛作住持とは、本、法藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力とに依る。願以て力を成じ力以て願に就く。願徒然ならず、力虛設ならず、力願相府て、畢竟して差はず、故に成就と曰ふ。

「若し生れずば正覺を取らぬ」といふ遣る瀬無き誓ひの親心より、今日遂に成佛して下されてあるが、阿彌陀佛の自在神力である。今日阿彌陀佛の自在神力のお姿は、此の誓ひがもとになりて、現はれて下されてあるのである。此の若し生れずばの誓ひの願が、やがて今日阿彌陀佛の救ひのみ力なのである。此の願と力である。此の四十八願の願と、此の阿彌陀佛の力とて、我々は助かるのである。「願以て力を成じ」今現に我々を救ふて下さる阿彌陀佛の廣大の力、此の力といふも唯來るのでは無い。我々衆生の罪の有様を見て、おつとして居るに居られぬ法藏菩薩の本願の誓ひの深切、此の本願から來るのである。故に「願以て力を成じ」である。「力以て願に就く」——唯力があるからとて、我々が頂けるのでは無さ。其の法藏菩薩の廣大の願がありて、如何にしても衆生を救は

今阿彌陀佛の名號が、餘佛の名號に勝れたるは何處であるか。阿彌陀佛の名號には此の勝れたる本願がましますからである。若し此の本願がましますば、唯南無阿彌陀佛々々と徒らに稱へた處が何んにもならぬ。今阿彌陀佛の名號は、我より稱へる南無阿彌陀佛ではなくして、佛より南無阿彌陀佛と此の遣る瀬無き思ひを届けて、救はずば措かぬとある南無阿彌陀佛である。故に本願は、南無阿彌陀佛は矢である、此本願の弓で、南無阿彌陀佛の矢を届けずば措かぬ、といふが阿彌陀佛の御本意である。諸佛には其の矢がありても、誓ひの弓が無い。而も其の矢も佛より衆生に向うて下さる所の矢ではなくして、衆生より佛に向ふ所の矢である。處が今阿彌陀佛の南無阿彌陀佛の矢は、此の矢を届けて衆生を助けよう、我が此の遣る瀬無き本願の弓で、此の矢を届けて助けずば措かぬとある南無阿彌陀佛である。故に「本願を立たまはすば、名號を稱すとも無明を破せざれば報土の生因となる可らず」である。次には、

…：…しかるを阿彌陀佛は、乃至十念若不生者とちかひて、此の願成就せしめんがために、兆載永劫の修行をたくりて、今已に成佛したまへり。…

處て其の「乃至十念若不生者」の誓ひの弓がありても、其の弓が張つて來ねば何んにもならぬ、其の弓を張り切る所の力が無ければ何んにもならぬのである。即ち佛は其の誓ひの弓の下から、兆載永劫の御苦勞の力で、此の弓を張つて下さるのである。そうして張つて、張り抜いて、遂に成佛して下されたのである。そうして其の張り切つた力で本願の弓に南無

ねば措かぬといふ、此の廣大の誓ひから、其の力が働いて下さるのである。故に「力以て願に就く」である。此の廣大の力と願があるからは、「願徒然ならず、力虛設ならず、力願相府うて畢竟して差はず、故に成就と曰ふ。」——此の力願は虚しくはならぬ。此の二者相叶ひて、念々刻々切々哀々の心を以て、彌陀の大悲が我々の上に迫りて下されてあるのである。夫れが佛の本願力である。其の本願力が居て下さる上は、空しく過る者は一人も無い。夫れが「遇うて空しく過る者無し」である。と明示し下されるのである。

其處て前の「西方指南鈔」に戻りて、次には、總じて四十八願は法藏菩薩のむかしの本願なり。… 四十八願は一々法藏菩薩が衆生を淨土に生れさせ度いといふ願である。

…：…この願に答へたまへる佛果圓滿の今は、第十九の來迎の願にかぎりて、化土衆生の御方便は、おはしますべきなりと云なり。… 今日阿彌陀佛の自在神力のみ姿は、此の四十八願の不取正覺の誓ひがもとになりて顯はれ下されたのである。此の佛果圓滿の御姿は、此の誓ひがもとになりて現はれ下されたのである。其の中第十九の來迎の願は、化土衆生御方便の御姿である。其餘の四十八願から來る御姿は、皆な直きく我を助けんと、阿彌陀佛の御姿なのである。

…：…本願を立たまはすば、名號を稱すとも無明を破せざれば報土の生因となるべからず。諸佛の名號におなじかるべし。…

阿彌陀佛の矢をつがへ、何時でも我々に向ひ、我々の心に其の矢を届ける／＼として居て下さるのである、之が阿彌陀佛本願の大慈悲なのである。次に

…：…この大願業力のそひたるが故に、諸佛の名號にもすぐれ、となふればかの願力によりて決定往生をもするなり。…

此の遣る瀬無き大願業力の弓の添ひたる名號故、諸佛の名號にも勝れ、南無阿彌陀佛と頂けば、決定往生の身にして頂けるのである。… かるがゆへに如來の本誓をさくにうたがひなく往生すべき道理に住して、南無阿彌陀佛と唱へてん上には、決定往生とちもひふなすべきなり。…

斯る遣る瀬無き佛の誓ひと聞き、佛の思召と聞き、如何にも疑ひ無く往生決定すべき道理であると頂いて、南無阿彌陀佛々々と口に念佛が現はれて來て下されたが、其の本願が頂けたのである。之が此の南無阿彌陀佛を届けて、此の罪惡の者助けようとの本願が届いて下されたのである。故に「決定往生と思ひをなすべきなり」——もう斯くなれば、往生決定疑ひなく喜ばせて貰ふ事が出來るのである。次には、たとへばたきものゝにほひ薫せる衣を身にきつれば、みなもとは、たきものゝにほひにてこそありと云ども、衣のにほひ身に薫するがゆへに、その人の香はしかりつると云が如く、本願業力のたきものゝ句は名號の衣に薫し、またこの名號の衣を一度南無阿彌陀佛とひき着てんものは名號の衣の句身に薫するがゆへに決定往生すべき人なり大

願業力の句と云は往生の句なり、大願業力の往生の句、名號の衣より傳はりて行者の身に薫すといふ道理によりて觀經には若念佛者當知此人是人中芬陀利華と説けり、念佛の行者を蓮華に喩ることは、蓮華は不染の義、本願清淨の名號を稱すれば、十惡五逆の濁にも、そまざるかたを喩たるなり、また觀世音菩薩、大勢至菩薩、爲其勝友と云へり、文のこゝろは之も往生の句身に薫せる行者はかならず往生すべし、これによりて善導和尚も三心具足の者をば極樂の聖衆に接すとのたまへり、極樂の聖衆といふは因中説果の義なり、聖衆となる道理あれば當時よりして二菩薩と肩をならべ、膝をまじえて勝友となりたまふといふこゝろなり、命終の已後は往生して佛果菩提を證得すべきによりて、當坐道場生諸佛家とときたまへり、かるがゆへに一念に無上の信心をえて人は、往生の句薫せる名號の衣をいくへともなくかさねさんとあもふて、歡喜のこゝろに住して、いよく念佛すべしと云へり。

之が其の彌々往生決定と頂けた心の心持を示し下されたのである。いつもいふ着物の例へてはあるが、南無阿彌陀佛は此の一枚の着物を着せやうと、本願の心籠つてある一枚の着物である。若し生れずば正覺を取らぬと、法藏菩薩の遺る瀬無き願力の香の薫してある南無阿彌陀佛の着物である。此の本願薫力の香の薫してある南無阿彌陀佛を、あゝ有難いと頂く一念南無阿彌陀佛々々々に念佛稱ふれば、源は其のたきものの香ひにてありと雖、其の本願薫力の薫してある南無阿彌陀佛の着物を着せて貰ふたの故、其の着物の香ひが

いつしか身にうつる。本願薫力のたきものの香ひが、名號の衣に薫じ、其の名號の衣を一念南無阿彌陀佛と頂き、南無阿彌陀佛々々々々如來の願力を喜べば、其の名號の香ひが、身に染みて下さる故に、一點疑ひなく往生決定すべき身として頂けるのである。此の故は此の者を『觀經』には人中の芬陀利華と賞め下され、又觀音菩薩大勢至菩薩は其の勝友となりて下さる。之が妙好人である、希有人である。最勝人である。又初めに申した染香人と示し下されたが茲である。之が香光莊嚴の有り御みのりである。今日は之を申さんとして『香光莊嚴』の題を出したのであります。



慶 讚

君則臣則

〔十七憲法第三條〕

近角常觀

三曰承詔必謹君則天之臣則地之天覆載四時順行萬氣得通地欲覆天則致壤耳是以君言臣承上行下靡故承詔必慎不謹自敗。

第三條は十七憲法に於て相對世界の秩序の根本たる君則臣則を示したるものにして之を天と地とに則りて天覆地載の千古萬古渝り能はざる森嚴明肅の意義を闡明されたるものである。嘗て十七憲法の序論(昨年一號)に於て詳論せる如く、十七憲法の順序は其前に制定したまひたる五行冠位と同意味である、即徳仁禮信義の順序である。而して徳は其根本本體にして信仰である、絶對である。仁禮信義智は其根本より顯現し來りたる相對的秩序の差別相である、信仰の實人生の上實現したる嚴かなる法則である、而して其初めの仁なるもの

は其秩序差別の最初にして法則の根本である、古より云ふ如く仁の字二人といふことである、徳が人生の上に初めて現はれたるが君臣の大道である、是即ち仁である、之を世界起源に喩ふれば渾沌たる大氣初めて天地剖判して澄めるものは上りて天となり、濁れるものは下りて地となりたりといふが如く、絶對の徳が人生の上に萬古不易の差別、秩序の根本法則とあらはれて茲に君臣上下の別を實現し來りたるものである、太極兩儀を生ずるといへる如く實に是れ人生百般の秩序の根本である、太極一たび兩儀を生ずれば兩儀四象を生じ、四象八卦を生じ、幾多の變易を生ずるといふが如く、又一たび天地剖判すれば仰て天文を觀れば日月星辰二十八宿燦として懸り地には山川草木森として列る如く森羅萬象各其所を得て儼として動かすべからざる秩序がある、此秩序が即ち禮である、そこで冠位の順序には仁の次が禮である、今十七憲法にも第三條に於て一たび君則臣則儼として確立すれば此に天地上下の別を生ずるが故に隨て秩序整然として備る様になるそこで第四條には群卿百僚禮を以て本と爲すといふ簡條を生ずる次第である、そこで最も肝要なる問題は君臣の大則たる仁なる道は徳なる根本本體より生じたる點である、言ひ換へ

たならば君臣上下の秩序儼として天地の如く然る所以のものは君君たり臣臣たるの法則を生じ来る絶対の大道なるもの存するからである、是即ち第一條第二條に於て詳論せる（昨年三號、五號、八號）如く、人生問題の根源に光明を持來する三寶歸依の信仰によりて絶対の大平和を實現するものは是仁の大徳である、實に聖なる徳である、恐くは皇太子の御名の來りたる所以も此に在るのであらうと察したてまつる。

此絶対の信仰と相對の秩序との關係の問題は千古萬古實に肝要なる問題である、殊に現今我國に於ては最も緊要なる問題として上下官民の心を潜めて講究すべき點である現時思想界に於て理想的傾向を有するものは種々なる思想が入り亂れて健全なる絶対の信仰に達せざるが爲に種々の惡傾向を生じ、徒らに人間自然の儘を以て真なるものとして、其有様に委して生活するが如き放縱なる思潮を生じ、又從來の相對差別の秩序に對して徒らに否定的破壊的態度をとりて危険なる思想を抱くが如き病的顯象を生ずるが如きは實に浩嘆痛哭の極みである、是皆畢竟從來の差別道德の制裁が弛緩し去りて人心を統御すべき力ある信仰を缺くより起りたるもののである、是即ち從來の差別的道德を否定したる惡平等惡自由より

起りたる顯象にして苟も絶対信仰の根本義よりあらはれたる嚴肅なる法則の下に一厘毫も許すべからざる餘地なき者たる事は固より言ふを待たぬ、而して他の一方に於て恰も之と正反對に從來の差別道德を闡明して國家民人の制裁を嚴肅ならしめんと勉むる方面の傾向を見るに、唯律法的に強制主張するに止りて、彼惡平等の根本思想を勦絶するの正しき方法を講せぬのである、詳言せば差別道德の制裁の弛緩したるは決して其理窟を知らぬのではない、之に對する信念が缺けて居るのである、信念が缺けて居るものに向て如何に抑制しても決して其信念を起すことは出來ぬ、故に嚴肅なる秩序觀念を振興すべき根本精神即ち信念を培養することが肝要である、是即ち此十七憲法に第一條第二條の人生平和の根本義は絶対の信仰に在ることを示されて第三條に至りて之が人生に顯現して君臣上下の別、天地の如く炳焉たるものあることを示された所以である。

然らば既に第一條第二條に擧げてある絶対の信仰なるものが如何にして秩序觀念を生じて、而も之が實踐躬行の力を生じ来るかの問題を講せねばならぬ、抑々絶対信仰の内容なるものは自己の罪要を自覺し大悲の恩徳を自覺することであ

る、眞宗の言語を用ふるならば機法二種の深信を起すことである、是常に實驗的に味ひつゝある信仰の問題である、たとへば罪惡は物の重さの如くである、大悲は引上げる力の如き者である、物の重さと引上げる力とは其關係相離るべからざるものにして其一は他を以て計るべきものである、如何に物の重さかは之を引上げる力を以て計るのである、如何に引上げる力の大なるかは引上げらるゝ物の重さを以て知らるゝのである、其如く吾等が如何に罪惡の深重なるかは之を救濟したまふ大悲深重の五劫永劫の御苦勞を以て知らるゝのである、又如何に大悲本願の深重なるかは五逆十惡の我等を攝取したまふを以て知らるゝのである、歎異鈔の所謂「彌陀の五劫思惟の願をよくく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるをたすけん」とおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」云へる御言は實に遺憾なく絶対信仰の眞味を披露して余蘊なしと申すべきである、かくの如く無限大悲の絶対の御恩によりて初めて我身の無邊極濁惡たることを自覺するのである、我等が我身の罪惡を自覺してこそ初めて頭が下がるのである、項が折れるのである、腰が屈するのである、是即ち我等が人生に於

て相對秩序の觀念の起り来る淵源である。是ち即絶対の信仰が差別相對界に嚴肅なる意義を持來す燒點である。

常に述ぶるが如く信仰問題に於て最も肝要なるは絶対信仰の奥底に達することの出來ないものは人生相對界の上に現はるゝことが出來ぬといふ點である、海に入りて足海底に達せざるものは水面に浮上ることの出來がぬごとくである、中途にありて或は浮き或は沈み終に水に溺るゝを免れない、絶対信仰界に入るも、未だ大悲の奥底に達せざるときは浮きたる信仰に流れ、或は沈みたる信仰に陥り、遂に信仰に溺れて人生に活躍することが出來なくなる、我身は罪惡の身なれども絶対の大悲あるがゆへに差闕なしといへるは浮きたる信仰なり、絶対の大悲あれど罪惡深重なるゆへに致方なしといふは沈みたる信仰なり、浮きたるものは自然に流れ、横着に流れ、高舉に流る、沈めるものは煩悶に陥り、厭世に陥り、修養に陥る、而して一浮一沈交々來りて、遂に信仰に溺れて相對人生界に成立つことあたはず、例せばトルストイの信仰の如くである、一たび自覺に入りてより無抵抗に行へといふ教訓を爲したのである、神の意志の如く行へといふ宣傳を爲したのである、如何にも理想としては高尚であるなれども、罪惡の自

覺が乏しいのである、夫故に足地上を離れざる一塊肉の人間たることを忘れてしまふて神の如く行はんと試みることになる、夫故に國家、法律、財産、すべての相對事物を否定するのみならず、八十餘歳の高齡を以て猶家庭に安んずる事出來ずして隱遁を企つる様になつたのである、其向上策進して止まざるの勇氣は感ずべきも、相對差別界に成立し得ざる自覺たるを自證した者である、常に喩ふる如く此の如き自覺は恰も三角形の頂點を以て立たんとする如く人生に成立すること不可能である、しかるに煩惱具足と信知して心を弘誓の佛地に樹つるときは恰も三角形の底邊を以て安靜に固定するが如く寂然不動の牢固なる信仰である、此信念に住するときは天覆地載といふ堅牢なる相對秩序の法則を生じて來るのである。

偕此に至りて信仰問題人生問題の生命とも謂つべきは、どき要點がある、曰く信仰としては絕對大悲の恩徳によりて自己の罪惡を自覺するや否や、直に君父の恩徳を感謝し我身の不忠不孝を慚愧する身となるのである、此事は信仰の實驗ある人には直に了解することが出来るのである、佛日一たび出て、人生無明の闇を照したまふや否や、人生差別の萬物昭々として皆見つべきが如くである、絕對大悲の光明あらはる

出世間絕對の光明は世間差別の力となり、生命となるのである、既に絕對である己上は其大悲を感ずるや否や相對人生の上にも光明を持すのである、親鸞聖人が朝家の御爲國民の爲め念佛申しあはせたまひ候はゞめでたく候とあるが是である、此を要するに絕對なればこそ相對世間を超絶し、絕對なればこそ相對世間の光明となるのである。是即徳より仁を生じ來りたる所以にして第一條第二條の人生の根本義の信仰確立して此第三條の君臣の大則儼として顯現したる次第である。

此の如く絕對の信仰其儘が相對差別界に顯現して天地の如く君則臣則を生じたるのである、君王の四海に君臨し給ふと實に天の普く覆ふが如く、萬民一として愛子たらざるはなく、一草一木天日の照さゝるとなきが如く如何なる民草と雖天恩を蒙らざる庶黎はない、而して萬民悉く臣として君徳を仰ぐと普天の下率士の濱王臣にあくざることなき次第である、而して此君臣の關係は上に擧げたる三寶歸敬の信仰か實現して此に國家をして眞の絕對の意義たらしめ政治をして眞に絕對の大悲を實現せしむる様になるのである、四生之終歸萬國之極宗と申されたるが是である、四生の終歸といふはあらゆる生類皆救濟せられて解脱するのである萬國の極宗といふは荷

るや否や君父の恩徳歷々として自覺出來るのである、そこで信仰の實驗なき人は其絕對大悲の恩徳といふこと、君父相對の恩徳とは如何なる關係であるか、甚だ不審となる點である動もすれば君父等一切の恩を以て絕對大悲の恩徳と云ふのであると考へ安きのである、夫ならば畢竟佛は假の名にして其實は相對差別の總和に過ぎぬことになる、夫ては宗教とは言はれぬのである、此に於てキツバリと絕對大悲の恩徳は相對差別を超絶したるものたることを斷言せねばならぬ、親鸞は父母孝養の爲に一遍にだも念佛申したること候はずといふは此點である、かく超絶してあればこそ其大悲の恩徳を知るや否や君父の恩が知らるゝのである、そこで又第二の誤謬に陥り安きのである、即絕對大悲は相對差別を超絶すと云へば、何んとやらん、其二者の間に褒貶を挟むやうに考へ安いのである、能く宗教と國家と衝突するが如き誤解をなす人がある、是は此二者を恰も相對差別界の二者の如く一を斥けて他を奉ずるといふ様に考ふるからである、若しかくの如き態度をとる宗教ならば其宗教の絕對其物が怪しきものである、若しかくの如き態度をとる爲政者ならば宗教を理解せざる爲政者である、既に絕對大悲の恩徳が世間差別界を超絶すればこそ其

も國家が據となるべきは絕對の信仰にして若し此根據がなかつたならば國家として正義の光明を持來すとがなない。而して此生類の絕對の救済といふこと、國家の絕對の眞精神といふこと、は決して矛盾すべきものでない、何れの人も何れの世も此絕對の大悲を貴はずして成立つものはない、又如何なる尤惡なるものと雖、若し此信仰の力によらば絕對に救済さるゝ者である、大悲の眼中には一生類として其恩徳を蒙らざる者はない、所謂本願圓頓一乘は逆惡を攝すと信知するのである、故に人鮮尤惡、能教從之と申されたのが是である、此信仰の精神が君則と顯現したのが仁君の仁政である、聖徳太子十七憲法を制したまひしより朝廷の政治に全く此絕對大悲の精神が顯現されて奈良朝の平和なる天地を實現して死刑の如きも源平の時代に至るまでは之を用ゐなかつたのである、君子は其罪を惡みて其人を惡まず、仁政の力を以て其罪惡を憐れしむべきである、是實に君則の天の如く覆はざる所なき天徳である、若し國家不逞の徒ありたるとき徒らに其人を勦絶することを主とせずして其惡思想を斷滅することを勉めなければならぬ、是爲政者の最も省るべき點である、若し此天徳の覆はざるところなき仁政を以て下に臨はゞ如何なる醜草と雖

其徳に化せざることのあるべき、一旦其徳政に化せば茲に永久に不逞なる徒を根本的に勦絶することになる、悪思想を千古絶滅することになる、個人の救済と國の權威とは決して矛盾せざるのみならず此二者が相合するに及びて眞に各其絶對の眞精神に達したものである、此の如き徳政を蒙りて如何なるものも必ず自己の罪惡を自覺して改悔懺悔の心を生ずるのである、此絶對大悲の力によらずんば決して枉れるを矯正するとは出来ぬのである、而して此仁道を以て下に臨むは君則である、而して絶對に自己の罪惡を自覺して此天徳の恩澤に感佩し、身を捧げて君恩天徳に報むんとするのが臣則である。

此十七憲法に始終貫徹してある著しき文字がある、即臣道といふ文字である、第五條には『餐を絶ち欲を棄て明らかに訴訟を辨へよ乃至便ち財あるもの、訟は石を水に投ぐるか如く、乏しき者の訴は水を石に投するに似たり、是を以て貧民は由る所を知らず、臣道も亦焉に於てか闕く』とあり、十五條には『私に背て公に向ふは是れ臣之道なり、凡そ人私あれば必ず恨あり、恨あれば必ず固らず、固らざれば私を以て公を妨ぐ、恨起るときは制に違し、法を害す』とある、是の如き公正無私の徳に立たて身を捧げて君に事ふるか臣道である。島田審根翁は臣道會なるものを起して聖徳太子を中心として其御精神を煥發せんとて十七憲法を自書して頒たれたことであつた。而して是上の第一條第二條に擧ぐる絶對信仰の力により

告白

底抜けの懺悔

須藤 肇 正

私は不可思議なる佛縁によりまして、爰に初めて底抜けの懺悔をせさせて頂きます、なむあみだ佛。

私の祖父は、生前頗る厚信家でありまして、四十五歳の時、京都本山來詣の途中、琵琶湖に難船して、同乗五十二人と俱に江州北小松の土になつて居ります。常に吾が子孫より是非出家を一人出し度いと云ふて居られたと云ふ事を、父より時に聞かされました、私は遺傳的に幼少より佛法を好みました所から、十五歳の一月、決然、出家を思ひ立ち、師家新井町願樂寺に入り、傍ら新井別院に役僧として奉職しました、なむあみだ佛。

十七歳の時、師の浩恩によりて、地方の篤志家増村先生の有恒學舎と云ふ中學に通はせて勉強させて頂きました、けれども元來、固陋なる私は兎角俗學を輕んじ厭ひ、叡山にても入りて専心佛學を究め度いと思ひつゝありました、是非已が一大事なれば法を聞かねばならぬと氣付きましたのは、十八才の七月であります、以來切りに道を求め法を聞きました、師の御母堂は温厚なる篤信家でありましたので、毎夜々々伺候しては不審を正して貰ひ、懇ろに教へて頂きました。

て自己の罪惡を自覺し、懺悔慚愧して頭を下げ頂が折れて來りたる所て初めて眞の臣道を行ひ得べきである、大無量壽經三毒段五惡段に擧げたるは罪惡の者が絶對無限の大悲に救濟せらるゝや五惡を改め五善を修し、初めて人道を行ひ人臣の道を行ひ得べきものとなるのである、心口各異言念無實の者、不仁不順惡逆天地の輩、大悲の下に隨器開導せられて、仁政君徳に化せられて、其恩徳を感謝するや天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國豊民安、兵戈無用、崇徳興仁、務修禮讓の平和なる世界を實現するのである、是即ち四時順行萬氣通することを得といふ所以である、外界に現起する天然人事百般の出來事は各人皆我心の反映として肅々として謹むべきである、此の如き態度を以て君より詔を承て深く謹むべきである、一旦臣にして其臣則たる地か君則たる天を覆はんとする如き惡逆天地の事あらば是こそ上來述べ來りたる森嚴明肅なる君則臣則を破壊するものである、深自悔責、大悲恩徳の下に懺悔して必らず眞摯嚴正なる臣則に歸せねばならぬ、此に於て仁君上に言はば良臣下に之を承け君子の徳風上より加ふれば小人の民草必ず之に靡く此の如くして國家永久にして社稷危きことなし、此の如く信仰の根本義より臣道を行ふは是實に天壤無窮の皇運を扶翼する所以にして千古萬古上下官民擧て此聖徳皇太子の大憲を拳々服膺せねばならぬ。

南阿彌陀佛

爾后種々の煩悶に陥り、又様々なる御引立てによりまして、遂に今度は御信心を頂いたと腰を据ゆるに至りました。近角先生に御目にかゝりましたのは、去る四十一年五月、私は親しき友を喪ひ、悲嘆遺る瀧なく、一層の求道心から居ります矢先に、程近き高田町本誓寺上越婦人教會御講演の折であります、先生の御演題は「教行信證」の信卷別序の御文にて「選擇の願心」に於ける母の手續の衣類の喩へ、及び「矜哀の善巧」に於ける、入信諸氏の例など難有く聽聞して涙ながら歸りました、同年七月五智に於て曉島先生の我信念の御講話を聞きまして、現在安住と如來のなさしめ給ふとの御言を、たやすく、うわ聞を致しまして、中心首肯する能はずして、しかも吾れよく心得たる如く、萬事に對して如來の天命を用ゐる、口辯の如く此語を繰返して、遂に從來實踐躬行主義の根本標準を失ひ、中心不満ながら、何が善やら何が惡だやらと言論ぎうかし、如來を一種の自己忘罪劑の如く考へ、苦しさながら、冷かなる念佛、人目かざりの念佛勤行を營ませて頂き、遂に老莊の虛無平等の主義に左祖し、絶對崇拜信仰に陥りました、されど自分は佛敎信者なるが故に、習慣的義務的に、彌陀の大慈を説き、佛法宣傳者を以て自ら任じて居りました、あさましく、よつて常に私は日常生活に於て兎角、私は世間事と出世間事を別に考へ、世間事倫理を輕んじ、出世間事を重しとして、此兩者の交渉接續の問題に於ては、私の胸中多年の煩悶でありました。

師は常に私の誤謬と曲解とを憐み玉ひて、温嚴緩急其宜しきを得て、懇ろに教諭叱正し玉ふのであります。

近角先生も、亦時に私の心得の誤れるを觀破し玉ひて、信仰と倫理の交渉を容易に示し玉ひ、早く佛陀の大悲に氣付かざるべからずと訓へ玉ふなれども、何分私は明らかに佛陀の大悲を信じて、胸中一點の疑もなきものと、高き居りて、師を蔑ろにし、先生を悔り、倫理を否定し、世間虚假唯佛眞、念佛の在す以上佛陀の救済は明かなり、確實なり、唯念佛の外なし、佛と我との交渉は唯佛のみ知りて、假令、恩師なりとも第三者の嘴を入るゝをゆるさざるものなりと、中心平ならずして、尚ほよく聞かんと説教を聴聞し、救ふてふ大悲願なりとて念佛を申して居りました、今年の夏暑中休暇にも、師より大なる痛捧を加へられ、師の御母堂よりも、

「吾師は未だ眞實御信心を頂いて居らぬらし」と、私に不快遺憾なく感じつゝも、自ら謂らく、

此様に佛陀の本願の救済に疑ひなきに、何故に師はかく宜ふか、嗚呼此は、師は吾が中心を知らずして、外面的倫理的方面より吾を眺め玉ふなる故なるべし、實に斯非業の徒ら者なればこそ、愈々彌陀の悲願に救はれざるべからず、然らば吾が信仰に何等の疑ひもなし、難有しと、不平やら嬉しさやら、漸く彌陀の本願に持ち來りて、一向涙ながらに念佛を喜びつゝありました。

而して一方の人々に、信者ぢやとか、護法家だとかの稱讃を得て、苦しさながら、おんまるめに喜んで居りました。爾るに、同學那須君(江州人)が近頃甚だしき懷疑に陥り、自暴的に愁情を満てて、以て精神幾分の煩悶を癒やさんと努めて居りましたとす、所が國表の一檀家が、二十年間も開

法したる同行なるも、一旦逆境に陥りて致し方なく出京し、

不運に不運を重ね、甚だしき悲境に沈み、加旃、本年六月以來重病に罹り、命尚長き枕に臥して、彼を恨み此を啣ち。苦しみ居るとか聞きて、大に同情をよせ、折々往きて之を慰め、又其御領解を聞き糺したさうです、然るに彼同行は私如きあさましき者は地獄より外はないと、何事を云ふても聞かせても、其も承知此も合點を致し居りますけれども、私には、眞に彌陀大悲を感銘致しませぬと、自暴自棄、終には御法の話をうるさがる程でありましたので、那須君も致し方なく、此上は名師よりして諭し頂くより外なしと、もて餘して歸り、私に近角先生をお願ひしたいと相談しましたので、俱に先生に願つたのであります。先生は當時甚だ御多忙なので、何日か折を見て行かうが、其先に君が行きて、其同行に言へ、前には死なぬ積りなる故、其様に地獄行とか、お慈悲が分らぬか云ひ居れど、今晚にも死ぬ命なるを、其地獄行の者を憐み玉ふ、大悲悲ならずや」と、仰せられました、那須君は喜んで彼處に行き、殆ど先生の御言を鸚鵡的に繰り返しました、處が彼同行は大に驚き、大悲忽ちに眞心徹倒して、身を擧げて泣き、那須君を拜したとの事です、那須君も大に驚き、吾身の一大事と氣付きました、早速先生の御許に伺ひました、けれども折悪しく先生が御不在なりし故、亦私と相談して、菅瀬先生にお願ひし、彼同行と俱に、自分も一大事をおかけ聴聞し、初めて彌陀大悲願の浩大なるに氣付き奉り、從來吾が所行の悉く偽善名利の爲なりしに驚き、自己の職分を反省して居所安からず、惶惶、歸國致しました。私も之を見て異

様に感じ、先日之を、先生に一寸御話し申上たのであります、然るに先生例によりて、私に「左様か其は結構なる事である、されど其は他人の事に非らず、其は前自身の問題だ」と、仰せられたので、増上我慢の私は信心があると思ふて居たため中心不快に感じ、されど此悪者を救ひ玉ふ如來であると、亦まるめこみの信仰によりて安心致しました、されど何と

な物く足らぬ心地致しましたので、其夜幸ひ菅瀬先生奥様の御命日に當りて報恩講御法會に參列させ頂きましたので、従前の通りの告白を試み、御糺正を御願ひ致しました、濃厚なる菅瀬先生は、其は君に度々御氣付け下さる事で、一層難有い事であると、念佛し玉ひしにより、私は甚だ嬉しく彌々念佛して感泣しつゝ歸りました、而して不寐けながら、臥床に、に入りて床の温まる間、深夜念佛しつゝ、近頃友人より拜借せる、近角先生の舊稿「信仰問題」を拜讀しましたる會々戒律の眞精神と云ふに讀み至り「信仰なき戒律は枯木死灰に同じ、眞摯なる信仰は必ずや嚴肅なる戒律を生じ、行者自ら不和不覺の間に實踐躬行に伴はるゝものなり」との文意に當りて、俄然大なる反省を生じ、吾人在來、信仰と倫理問題とを別にして、世間事を顧ざる底の信仰の、不眞摯にして大なる偽善者たりしを知り、呆然自失、依る所なからんとするや、忽ち一種の靈感に打たれ、眞心徹倒、報謝の稱名口、突いて出て、大悲大慈の極みなきに感じて、床中慟哭して、念佛を喜び、念佛を以て迎ひ玉はんでふ、大悲の廣大甚深なるに嗟嘆するや、我罪障の益、底ひなきに驚き、嬉さが身に餘り、心にあまり、よくもよく罪深きを知りて、よくもよくも助け

玉はんと思召立ちける、本願のかたじけなきに感泣致しました、なむあみだ佛。嗚呼實に選擇の願心、大聖矜哀の善巧によりて、今初めて底なき懺悔を試み、永劫の一大事に氣付き奉れる嬉しさ、此時に吾が師と、近角先生とは、實に生身の佛陀に在す事を感じ奉りました。

ながのの御手のかゝりし菊の花

勿體ないやら、申譯けないやら、嬉しいやら、爰に初めて眞實なる實踐道徳の標準を認めました、私は師にいつも、信仰を頂いても、何日如何なる場合に、如何なる事をなすやも計られず、世間善惡の事に關しては、唯々業報にさし委する外なし、是は如來よりゆるされたればなりと申上げました。今より願みれば、其不心得、言語に出す能はざる程で、あります、されば常に愆情にさし委せて、強ひて之を抑制せんとはせざりし故に、師に常に大なる迷惑を持來たり、常に師に逆らひ奉り、両親にも大なる心配をかけました、嗚呼此不孝不義、身を寸分して謝せざるべからざる事でありました。師は常に憂慮し玉ひて、危険なる信仰として、益々慈愛をかけ玉ひし事でありました、今にして初めて渾大な御恩が知られ、身を粉にしても、御心に添ひ奉らむと決心致しました、あまりの喜ばしさに、翌朝早々近角先生に伺ひ、御禮を申上、朝勤行の助音をせさせて頂きました、正信偈及び折よくも次には

三朝淨土の大師等 哀愍攝受し玉ひて
眞實信心勸めしめ 定聚の位に入れしめよ。
他力の信心得る人を 敬ひおほきさによろこば

即ち吾が親友ぞと
如來大悲の恩徳は
師主知識の恩徳も

教主世尊はほめ玉ふ。
身を粉にして報ずべし
骨をくだきても謝すべし。

不了佛智のしるしには
罪福信心善本を

如來の諸智を疑惑して
たのめば邊地にとまるなり。

佛智の不思議を疑ひて
邊地懈慢に止まりて

自力の稱念このむゆへ
佛恩報するこゝろなし

罪福信する行者は
疑城胎宮にとどまれば

佛智不思議を疑ひて
三寶にはなれ奉る。

以上六首と、歎異鈔第二章の御心と、第三章の御意、今更の如く泌々と感ぜられました。

此遺瀨なき大慈悲なればこそ、菅瀨の奥様の言遣されし日記に於て、他人に逢ひては先づ第一に言ひ出したきは大慈悲を知らせたき事なりとの御心、善く領解致しました。嗚呼私は大に浮薄なりき、偽善なりき、

如何なる人も、皆早く氣付き奉らざるべからざる事は御佛の大慈悲なり。

他力の願行を久しく身に保ちながら、よしなき自力の執心はほだされて、むなしく流轉する事は、聞き分けて得信せぬ者の事なりと、

よく／＼仰ぎ見れば、十方衆生救済の大慈悲遺瀨なき招喚なれば、早く本願に氣付き奉れば、各々其堵に安じて、容易く彼岸に運ばるゝ事を、おぼまじき哉、危い哉、何を措きても、先づ第一に注意すべきは、彌陀大悲の勅命を聞くべき事でありませ、世間並々の事になし置くべからざる事と思はせ

自 督

歳晩の感謝

(不斷煩惱得涅槃)

○今年もはや終りに臨み、今年一年間廣大な御慈悲を共に喜ばして頂き、共に御恵のうちに生活させていたゞきしを感謝する次第であります。年々歳々年の終りにのぞみ、其年々の廣大な御恵を喜ぶが、殊に今年は遠く昔を振りかへり見るに實にありがたい。多年の間種々話し、殊に際立て、信仰をば話したる點が段々と諸方へ行き渡り眞實信仰の點に氣附く人が多くなりた事である。

○明治三十五年以來信仰を話し始めて丁度九年になるが過去をふり返り見れば種々な遍遷がある。殊に三十七八年の頃には著るしく際立ちて信仰が起り、又一面には信仰が理解せられずして種々に人々の考がまとまりて居らぬ様な事もありましたが、段々と自分が信仰をはなして居る處では追々に信仰が諸方面に行き渡り、殆んど自分としては今年末に際し、自分の申し度事、自分の届け度事が深く諸方面に行き渡つて下

て頂きます。
待ちかねて恨むと告げよ皆人に、
いつをいつとて急がざるらむ。
急げ人彌陀の御船の通ふ世に

乗り遅れなば誰れか渡さむ。

實に罪惡者招喚の大悲願、難有く感じ奉り、此悲願に逢ひ奉りて、始めて眞聖なる活生涯に入り奉りし事を喜び、粉骨碎身の誠を挺て奉らむと決心し得るのであります。底抜の懺悔は此處に生ぜしめ玉ふ事と感じます、なむあみだ佛。私は今初めて三願轉入の次第を明らかに感じ、以て江州の御方の一方ならぬ御手引を知り、其宿縁の管ならぬを感じて、偏へに他力廣大威徳の常に冥加し玉へるに驚喜する次第であります、なむあみだ佛。

唯念佛して助けられまゐらすべしと信ずる外別の仔細なきなりと、

此あさましき者を助けむとて、種々御苦慮遊されし大悲心、天地に踊躍して感謝し奉る事でありませ、

嗚呼底抜けの懺悔、なむあみだ佛、
嗚呼今迄は吾は惡しと云ふとも、其底尚ほ曰くあり、
此故に彌陀の救済必要なりと申譯けしき、嗚呼あさまし

されし様の感じがします。それで殊更ら非常に信仰の方の著るしい事、御慈悲の行き渡つて下さる事の難有き事としみ／＼感謝する次第であります。

○かく申しますは過去九年間自分の周囲に御縁のある諸方面のことに就きて話すのであるが、又社會全體としては、なか／＼十分に行き渡るといふ譯には行かぬ。ます／＼如何しても信仰でなければ立ち行かぬといふ現象があらはれる様である、御同様に此ありがたい御慈悲を喜ぶものは、何卒社會全體の上に御慈悲の行き渡る様にあれかし、遣るせなき御思召の届く様になれかしと思ふのであります。雜誌が大層遅れましたが、先達以來常に思ふて居る意味の事を求道にのせました、どうか此信仰を喜ぶものは、何卒此御慈悲が世に廣まる様、國家が安穩なる様に、人世に平和なる様に、此御慈悲が廣く行き渡りて下さる様に思ふのであります。多年の間話しもるうちに一つ一つ御縁になりて廣まり、困難な事ある毎に又御慈悲を喜び戴かして貰ふと云ふ様に小日はたから共に入らして貰ふ、此點に於ては思召の一通りならぬ事を知らせていたゞきます。

○偕如此く多年の事柄を廻想いたし、段々と喜こばしていた

ときても、頂く處は唯一つ所である。たゞ一處とは何の點かと云ふに佛様の廣大な御慈悲を頂く一念に我身の罪深き事を心底より思ひ、罪深き我を見捨てぬ御恩の貴さを深く喜ぶ他は無し。今日の題は不斷煩惱得涅槃と云ふのでありますが、煩惱を断せずして涅槃を得といふ事は他力信心の上に於て最も肝要な貴き味である。其意味は何かといふに我々は煩惱具足の者、其者が一念佛の廣大な恵を頂かして貰ひ、あなたの深き御慈悲を頂かして貰ふ一念に其罪深き者が、如此く淺ましきものを殊に見捨て給はぬ御慈悲を殊に貴く頂かして貰ふ事が不斷煩惱得涅槃である。

○際を立て、云ふと他力の信心を頂くに尤も間違やすい事は、自分は煩惱具足の凡夫である、ではあるが御慈悲がある故煩惱具足であつても構はぬ、といふのでは眞に戴いたのては無い。若しかく頂くと、罪深く煩多き事を佛の御慈悲の下にゆるされる様に構はんのぢやと思ふので御慈悲を頂けた様で頂けぬ。又一方で反對に自分の様な罪深き者を助けて下さるなれど自分はかく煩惱の深き者故駄目と云ふのでも亦佛の御慈悲を煩惱で打消さうとするのである。前者も後者も共にいかぬ。

心させていたゞくのである。

○そこで、かく不斷煩惱得涅槃の信仰の有様を述べたが、然らば如何にして此様に戴かれるかとよく思ふのである。人も尋ねられる。處て話し度事は次の事である。先達西有穆山と云ふ曹洞宗の名高き大徳がなくなられたが、私も一度御目に懸り度思ひつゝ、別に是非御目にかゝられねばならぬと云ふ事も無かりしもの故其機會がなかつたが、たゞ求道の方が尋ねて來られて、西有穆山師に御目にかゝりた話をしました。で間接に其御話を承つて居りました。其人が穆山師に行きて禪家の人に尋ねる様に云ふたのですが、天地宇宙と我とは一體と思ふと云ひました、西有さんは言下に答へて思ふだけ悪いと云はれた其話を聞き此上も無い貴き話と感じました、此事は私には別に關係は無い事なれど、私にしてみれば、阿彌陀佛の御慈悲を戴く點に就きてある、佛の御慈悲をありがたいたと思ふてゐるのでは無い、思ふては無い如來が私を助けると云ふ御慈悲を直々聞いた胸のうちは、疑なく助け給ふ御慈悲の届いた一念に於て思ふの何のと云ふ處では無い、忘れんとしても疑ふとしても出來ぬ。光到れば聞さる如く、廣大な御慈悲の我に届きし時は忘れんとしても忘れられぬ、これ

○眞實の處は煩惱具足と信知して本願力に乗ずれば即ち機身まで果て、法性成樂證せしむ、あゝ淺ましき者ぢや、かく淺ましき者故佛が助けんと仰せ、申譯なき罪深き者ぢや、と我身の罪深き事と御慈悲の貴き事とこれである。御慈悲の貴き程我身の淺ましき事を知らせる貰ひ、我身の淺ましきほど御慈悲の貴さを仰ぐ斗りである。一念は我身の悪しといふ一言、御慈悲ありがたしと云ふ一言葉、打消す處ではない、かくも悪しさを、かくも助けんと仰せ、御慈悲である。我身の悪しさを自覺する事は我身のかくも悪しき故助けて下さると廣大な御慈悲の前に懺悔する、ほど心が樂になり安心させていたゞくのである。佛の御慈悲を仰げは仰ぐほど我身の罪深きため、悪しき爲にかくも御厄介をかけ参らす事よと我頭の下るのが不斷煩惱得涅槃である。一向專念の骨目といふは一處である。佛の廣大なる際貴きといふ事と我身は悪むといふ事とである。弘經大師宗師等極濟無邊極濁惡、際無く悪む我身を見捨てず、哀れ如此き者が可哀いやと無限絶大の慈悲をもて眺め給ふ佛である。此慈悲にあはずんば、してみやうなき者である、これなくば、悪しき者がどれだけ悪むいゝと云ふてみるも駄目である此慈悲一つで安心させて貰ひ、懺悔し安

を憶念と云ふ、私の方で思ふてゐる信では無い、我の方からありがたく思はずとも、眞の親様があらはれる一念に、あゝありがたいと云ふ斗りである。

○又或時に或人が聞いた、全體信心と云ふものは、如何した時に得たれるかと聞いた、或人は死にしまに信仰に入つた、或人は煩悶して信仰に入つた、又或人はかく／＼の時に入つたと云ふと自分も煩悶したら、病氣した時に氣附けばよかつたなど、云ふても駄目である、眞面目な信仰を戴くのでは無い、穆山師は即今入つたらいいだらうと云はれた、即今と云ふ事は實にいゝ、あの時、此時と云ふを待たぬ。即今廣大な眞實の思召を戴きて見れば何時戴くと云ふ處では無い、其思召の聞えた一念にありがたう御座りますと云ふ斗りである。

○正信偈にいへば阿彌陀佛の本願を憶念すれば、自然即時に必定に入るとある先達も皆さんに申したのである。皆さんの中には一年中といふ位では無い多年の間聞きに來て下さる方がある。此等の人は早や私の申す事は十分に聞き取り、相應に御慈悲を喜んで居て下さる。然し中には一つ際立ちた信仰に入りたといゆふて告白する人は際だちし告白すれば、空るて腹をヒツクリ返した様に眞に喜び度いあゝもしたい、か

うもしたい、と思ふは無理のない最な事と思ふ。然し自然即時人必定ぢや無い、どうして、こうしてと思ふのでは自然では無い、御慈悲に逆に向ふのである。

○丁度瀧が段々落ちておるのに、下から之を上逆に登らうとする様なものぢや、下より眺むれば實に震天動地の壯觀で其様に如何したら自分もなれるかと思ふてゐる様な者である。先夜ト思ひ出したが、自分の思ふ事は瀧の例で遺憾なく云ひ現はせる様である。餘程昔のことを思ひ出したが、各高さナイヤガラナイヤガラの瀧などが著るしき例である。瀧の下から見れば、殆んど何とも形容して見様なけれども瀧の落ち口の處に丁度岩が出てあつてズツと歩いて行かれる様になりておる處へ行きて見ると實に異様な感じがした。瀧の下から見れば、目も鼻も當てられぬ現象なれど、瀧の落ち口に近より見れば、向ふの方の湖水より、一面の川となりて急流とはいへ、除々に流れてる川である。湖水より洋々となだらかに流れて居る水が崖の處へ行くと著るしい現象になるのである。下より見れば上にどんな大仕懸があるかと思ふほどなれど、高さより低きに落つといふ水自然の道理により滑に流れる水が最後にストンと落ちた斗りぢや、外から見ると大騒動に見えるが自然

實に自然である。親鸞聖人が此自然のありさまを念佛成佛是眞宗といはれた其一言にあらはれてる。信は願より生ずれば念佛成佛自然なり、自然は即ち報土なり、證大涅槃疑はず、念佛成佛是眞宗、萬行諸善これ假門權實眞假をわかずして自然の淨土をえぞしらぬ、願力より届いて下る念佛成佛皆自然である、南無阿彌陀佛と念佛を稱へさして貰ひ自然に佛土に往生さして戴かれる。

○遣る瀧なき思召が届けば自然に御念佛があらはれる。かくじて日暮すれば、此世界は皆廣大な御慈悲が現れてくる。火宅と云ふて家に火が附いておる様な恐ろしき世なれども、九十五種世を穢す、唯佛一道清くす、菩提に出道してのみぞ火宅の利益は自然なる。て自然の御はからひにより、自然の淨土に往生さして戴く。實に一念である。此處に氣づかねばならぬ。稍もすると他力と云ふ事を世界の事に思ひ、我々の座する處、食する物、人生の生活は皆他力の力である故皆他力である。世間の他の事物や境遇の様に思ふ事がある。これは私の申す他力の意味と違ふ。人間計らずの間に他力の間に居ると云ふ意味では、時代思想によくある自然其儘で生活するが、いふ様になる故にかぬ。

である。

○自分の心に御慈悲を氣附かして貰ふも然り、法然上人の御言葉に、煙は上にのぼり、水は下に下る、果物に酸きものあり、甘きものあり、是皆自然の道理なるよし仰せられた。これが即ち念佛は義無きを義とすると云ふ事でありませう。助けるといふ御慈悲がスラリと戴ける心もちは、倍是程の御慈悲でありしが、我身ほかくの如く悪しき者なりしか、此御慈悲あればこそ、私を見ず給はず、かくも大なる御苦勞かと懺悔する、其様は彌陀佛の本願を憶念すれば自然即時にぢや、ソロリと獨りに入る。さらば際だ、ぬかと云ふに自然に即時にぢや、即今其時がどうもありがた、即今不退轉の者となる、戴く時は極自然ぢや、長々と瀧の例につきて話したるが眞にいたゞく心持は自然ぢや、到り届いて下された時は實に際だちてやるせなき御慈悲なりけりと、今迄流れたる水が俄に落ちて瀧と爲りし如くである。これほどの御慈悲を知らなんぞかと申譯無かりしと愈々届いた事は此上もない貴き御慈悲である。

○實に此味は際まり無い、一方から申したら實に自然で無理な處は少しもない、湧する者が水を得、満足を得といふ風にならぬ。○親鸞聖人の教行信證に他力と云ふは如來の本願力なりと云ふてある。周囲の事情事物ではない、即ち、私共罪深き惱多き者を必らず助けるといふ思召が他力である。眞宗と云ふは本願他力と云ふ遣る瀧なき本願が他力である。遣る瀧なき御慈悲一つ氣が附いて戴く一念が肝心である。彌陀佛の本願を憶念すればである。そこを戴かねば眞の味は戴かれぬ。

○歎異鈔にかくいふ章がある。「念佛の行者自然に腹をもたて悪しき事なる事を犯し、同朋同侶にもあひて、口論をもしては、かならず廻心すべしと云ふこと、此條斷惡修善のこゝちか、一向專修の人に於ては廻心といふことたゞ一度あるべし其ゆるは日頃本願他力眞宗を知らざる人、彌陀の智慧をたまはりて、日頃のこゝろにては往生かなふべからずと思ひて、もとのこゝろをひきかへて本願に歸するをこそ廻心とは申しさふらへ」とある。こゝは實に貴い事である、前にも云ふたがひそかに考へてみるに當時も自然にまかせて自然に惡様なのも悪事するも自然であると外界の事柄を自然に任して悪くても構はぬと云ふ風にしている人もありしもの故、必らず廻心すべしとて一方には悔ひ改めて善くせねばならぬとかいふ風になつて來たのである。一遍く善くせねばならぬと云ふ

のも間違である。今日の思想界でもそうである、自然の風にやぶるもあり、律法主義にて自然に反対して居るものもある。我々の信仰の問題にても自然に任して居るものいけねば、悪しき心起してはいはぬとよくなければいかに力んでも自力となりていかぬ。

○外界に任して置く自然でない、廣大な御慈悲に氣附く時が自然である。廻心と云いも其廻心ではなく、如來の御慈悲に氣附いた時自分のかくも淺ましく悪かりしかと氣附かせていたいた懺悔の廻心で、一生に一度である、日頃本願他力眞宗を知らざる人彌陀の智慧をたまはりて云云一遍の廻心ではない、斷惡修善でない。日頃他力眞宗を知らざる人が一念佛の智慧をたまはりて日頃の心では住生出來ぬと思ひて、本願に歸するのである。我々が當り前ならば悪るい事をよくせねばならぬと云ふのであるが、一つも出來て居らぬ。一つも出來ぬのが、日頃本願他力を知らぬ人が彌陀の智慧をたまはりて見れば自分がするのでない、自分の力でよくなるほどの程度の悪しき者ならず、惡を斷じざる事が出來るものならば、佛は苦勞はせぬ。よくならうと思ふてゐるのは自分を買ひかぶつてゐるのである。よくなれるほどの人間でない、實に凡夫

報が來て居て昨夜思ふて居た折柄なれば飛んで歸つた次第であります。歸りて長崎へつきもう二三日で江州へかへれる事故よさうかとおもひましたが友人もうちましたから電報をうちましていよ／＼歸つてきた事を報じましたら、父と母とが電報を取り合ひして狂氣の如く喜んださうであります。其をきいて私はつく／＼自分は相當に親思だと思ふて居たが私の思は足らず、親の思は計りしられぬ深いものとしらせて貰ひました、親の心にくらぶれば實に自分の大まちがひて親を忘れ通してあつたと我身の不孝に氣がつく。

○此様に阿彌陀佛の御慈悲をさく一念に自分がよくして居るの、如何しようの、こうじやのと思ふて居たが、よきもあしきもさん／＼に碎けていよ／＼如來の御慈悲に氣附かして頂きし時が一念である。大體人は二つの傾向に向いてある。自然にまかして居るものは悪うてもよいと云ふ者と、悪しき心ありてはいかにぬといふ者の二つである。此二つにからまりて御慈悲に氣附くべき者が氣附かぬ。悪いけれどもとか、悪ふてもよいとか云ふて煩惱の身の上故これてよいのぢやと思ふて居る。悪しき者を助ける云ふて居るが悪るうては行かぬ。と云ふてゐる。これほどの悪しき者ぢやから、見捨てんぞ、可

である、よくなれうと思ふのは大間違、瀧の下より上へ登つて見る事が出來ると思ふて居たのは我身を買ひ被つて居るのである。我身の力で煩惱を斷ずる事が出來ぬ、かくの如き人生、如此煩惱具足の我らなればこそ佛が助けんと御苦勞下されしかと憶念すれば、自然に即時に入必定ぢや、かくも貴き御慈悲を頂き乍ら、これを知らず何に迷ひ居りしかと氣附かしていただく。

○此處は先程申せしよく一念喜愛の心を起しぬれば煩惱を斷ぜずして涅槃を得と申す味である。信樂を獲得する事は如來撰擇の願心より發起するである。かく云ふと昔の事を思ひ出すが私の親の事である。毎度云ふ事であるが親が私に柔術を習つておいたら西洋行つた時など宜敷からうと私のまだ高等學校に居る時代に云はれた。其時私は親と云ふ者は何をいはれるやら馬鹿なものであると頗る横着に考へて居た。其後西洋へ行きまして二年ほどたらし或夜の事床中でフト其事を思ひ出した、嘗ては親は愚のものと思ひしが洋行も事實となりて今現に此處にあり、親の心で思はれた様にかくして居る。と思ふと實に申譯なきやら有りがたいやら直ちに口を漱ぎ沐浴して經を拜讀しました。其明日大學へ行つてゐる間に電

愛そうじやと呼びつけて下さる御慈悲である。今日迄よくなれぬ／＼といひしも間違、思召を打消してよく自分でなれると思ふて居たのが間違ぢや。煩惱具足の身の上ながらこれをもと云ふて居たのが間違ぢや。如何にも煩惱具足の物ぢやと棟が折れてしまひ、煩惱具足の淺ましき我でありますと、悪ふてもや、悪いからではない。眞實悪しき者と棟の折れ頭の下りて安心させていたたくのである。又これもたらぬ。今少し／＼と自分が知つて知りぬくと云ふのではない。大悲の仰せに心底より自分の悪しきを知らせて貰ひ、煩惱具足と信知さして貰ふのである。悪るいものでもかまはぬと云ふ思の起るは眞に我身のあしきを懺悔さしていたゞく心地ではない。たつた一念自分が悪るかつたと人を疑つて居た處が自分で片づけておいて忘れて居たのがわるかつた様に際をたて／＼しらせていたゞき、あやまり果てる。これが自然即時入必定、實に貴き如來の御慈悲である。

○先程から申せし事は信仰の一念につきてゐるが過去に振りかへり見れば皆此廣大な御慈悲により御縁を結びしていたゞきをそれからそれへと段々とやるせなき思召によりて信をいたゞかして貰ふ事である。かく自然に不思議に限りなき御慈

信仰書簡

をよるこばしていたとき、さて自分現在の心地ありさまは如
 悲何と云ふに御慈悲の貴いだけ、それだけ淺ましい、廣大な御
 慈悲を戴くに付けて水くさい淺ましい薄情な我也と思はして
 頂き、十年立ちても少しも角がとれぬ、我身は淺ましい煩惱
 深き事を知らして貰ふ。かうもならかあ、もしようかと自分
 の力で出来もせぬ事をのみ思ふのである。そらごと、たわご
 とまことあることなしとある如くである。さらばしてみやう
 なき世の中、我身かといふに、念佛成佛自然なりて右も左も
 附縁熟し來りて悉く自然に流れこまして貰ふ。廣大な御慈悲
 の現は實にありがたい。南無阿彌陀佛の一つである。我身の
 上に御慈悲があふれて下さる計りてなく、阿彌陀佛の廣大な
 御慈悲を讚嘆して諸天神皆守つて下さる。これよりあらはれ
 る處の信心の利は實に許りしられぬほどである。

○蓮如上人は歳末の禮には信心をとりて禮にせよと仰せられ
 た、茲に皆々様と大悲の中に南無阿彌陀佛と共に歳を送り、
 南無阿彌陀佛と共に無事安穩に新らしき年を迎へたいもので
 あります。南無阿彌陀佛。

成することになると、自分で解釋を書いて見た時實に崇高な
 る感が湧出致し、覺へず念佛頻りに顯はれて下され候。然て
 夕佛參の時御一代聞書三の二、佛法者は法の威力にて成也、
 威力でなくば成らざる也、乃至たゞ一文不知のものも信ある
 人は佛智を加へらるゝ故に、佛力にて候間人か信をとるとの
 御教化を拜讀する順に當り、必みく難有く勿體なく、之も
 偏に佛の御引立、先生の御高恩と存じ、夜に入りて不文相認
 め失禮を顧みず右申上候御直し被下度願上候也
 十六日 三瓶 徳 英

謹啓今夏圖らずも羽犬塚にて先生の御高德に接し何とも有
 り難き宿縁にて候ひつらん。
 今まで法を全く方便のために求め居り候、先生の御前はあ
 きらめ主義ぢや、名利を取りたいが山々だけけれど、取れない
 からのあきらめぢや、お前のは全く横着心ぢやと懇々とお示
 し下さつたこと、今更の如く有り難くいたゞき居り候。羽犬
 塚にては殆んど三日三夜眠りなして後には、ぼんやりして
 有り難きお示しも、ちるちる程でした、どうしても信じきれな
 いと、落膽失望致した最後の一朝、先生はもう久留米に立た
 るゝといふとき、忽然氣付かせて戴いたのは、煩惱具足と信知
 して、御和讃にて、あの時先生に走りついた次第でした。
 それから益々御慈悲を喜ばせて載いて居りましたが、然し
 どうしても踊躍歡喜の情が湧かないのは、ちと妙なことであ
 ると譽田先生にも申して、それを心配致してゐました、處が一
 昨夜より久留米で多田先生の講せられた「歎異拜講」が偶然

拜啓時下秋冷の節、先生益々御健勝各地御巡化二利御双行
 被下遊候赴欣喜の至りに御座候。懈怠なる小生先年御蔭様
 て御引導に預り、求道にて絶えず御引立を蒙り愛教に誠難
 有く拜見させて頂き、同心の人に語りつゝ、碌々消光罷在候、
 荆妻大に大悲の深重なるに感謝致居候。
 小生本日易行品を御縁として本典行巻を拜讀し、餘りの事
 に驚き、句體なく嬉しく感じ候事乍失禮先生に申上候間若し
 間違ひに御座は直に御直し被下度願上候也
 易行の行に就て、種々講録もの拜見仕候處、行は本典の所
 謂第十七願所行の位の大行にして、諸佛咨嗟の法體我名であ
 るが、之が衆生の能行に廻はりて來て、眞實信心の稱名と顯
 はれる、此意で行巻の初に大行を諸佛稱名之願と標して、其
 下たる細字で、淨土眞實之行、選擇本願之行と出され、之が
 眞實信心の稱名に當り、此稱名が本願の乃至十念の稱名で、
 行者能行の稱名が所行の第十七願へ持て行かれ、融通される
 相たを、高祖聖人は、諸佛稱名之願淨土眞實之行と御示し被
 下、衆生能行の他力念佛が、諸佛稱揚の稱名と徳を同ふし、
 他の人に聞かれた時、諸佛稱名之願に屬して、法界の化導を

手に入りまして讀みかけました、例より例の通りで自分に造
 つた様な喜び方をしてみましたが、だん／＼頁をくつて、第
 九章に及びまして、翻然何ともかとも云へぬ、喜ばねば居ら
 れぬ様になりました、「よく／＼案じ見れば天に踊り地に躍る
 ほどに、喜ぶべきことを喜ばぬにて、愈々往生は一定と思ひ
 たまふべきなり」よくも／＼六百年のその昔、唯圓房が私に
 代つてお尋ね下さつたことである、助かるまいと逃げてもて
 ももう／＼逃がしはやらぬと申さるゝに候。
 願みるに私程罪業深重の者は無之候、總て過去のあさまし
 かりし我を思へば身の毛もよだつ様にて候。豫てあんなよい
 心掛けの人だから御信心には入れるだらうなど考へ居り候
 處、此の度よく／＼御親の御本願を味はせていたゞくとそん
 な善人のための御本願ではあらせられなかつた、全く／＼此
 の罪深き、一人て泳ぐことの出来ぬ我等ごときものゝための
 御誓であつた、あゝ實に／＼佛恩の廣大無邊なものには驚かさ
 るを得ないのであります。南無阿彌陀佛／＼
 それから、羽犬塚で最初に先生にお尋ね申し上げた、未來
 安住の問題も此の第九章をいたゞいて有り難くて／＼も淨土
 に往生せずには居らぬ、心配處か「未だ生れざる安養の淨土
 はこひしからず候こと、誠によく／＼煩惱の興盛に候にこそ
 急ぎ参りたき心なき者を殊にあはれみたまふ也」あゝ何たる
 大悲大願の有り難きことよ。南無阿彌陀佛々々々々々々々々々々
 甚だ亂雑なかき方に候へどもあまりの嬉しさに筆のみ先さ
 に走りてかくなむ。
 後れながら亡先生の御親切有り難く御禮申上候、申して愚

か私如きもの、此の御慈悲に氣附かせて戴いた、何の言葉を以てか御禮申し上げよう

十月二十日夜十二時

江頭 六郎

一筆申上候、時下秋冷の候と相成候處、先生には益々御清穆、日夜大法の御爲に御奔走被遊候由、奉大賀候、降て私事、慈光の下に細々ながら念佛を力に消光仕候に付き御安心被下度候、扱て先般講習會には御手厚き御教化を聴聞し、且つ萬々御懇なる御示談を蒙りて、長々と煩ひ悶へてありました我胸の中も、今は黒雲晴れて念佛の喜はれ候者になりましたは何たる不思議の御本願やらと感謝仕居候。誠に宿世如何なる因縁ありて、先生の如き眞の知識に遭遇せし事よと歡喜の涙に咽び居候、私目下の心状は

一後生の事に苦悶せしより日夜心の中が何となく、安からずして、暮して居りましたが、先般先生の御示談を頂きてより今は早や後生も、未來も知らぬ時の子供の様な心地になりて、何の心配も苦悶もない様になりました何たる不思議の事てしやうか、

一私今日の所作柄は、只だ見た物、聞く物に觸れての日暮してあります、御慈悲に取りては、只念佛と、懺悔より外ありません、

今後は命かぎり根かぎり聴聞であります故に、私存命中は先生の御慈誨を蒙り度候間幾重にも御願申上候

九月 日

山口 廣子

謹啓此度長女松子逝去に就き、御丁寧なる御悔狀を賜り、且つ後生の一大事たる事を御警告被下、一同難有肝銘仕り益々佛恩の廣大なるを仰ぎ、御慈悲の許に細々ながら御念佛の日送り爲致被下事を喜び申事に御座候、毎度御引立の程厚く御禮申上候。御指命に従ひ、まつの平生の喜び並に臨終の様子不遠慮ながら申上候。

平生の自督

六年前に發病、醫師より難症たるを示され、早速鎌倉へ轉地専心加養致し居りしに一時重體と相成り候により定命限りあり、未來こそ永切の一大事と存じ、御慈悲の御話しを致候。要は、汝や自分如き無智にして罪作りの者は逆も助かる道は無いのである、然るに平生聴聞の通り、阿彌陀様こそは、可愛く御助け被下のである。御聖經に極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂と説き、御和讃には極惡深重の衆生は他の方便更になし、ひとへに彌陀を稱してを淨土に生るとのべたまふ。汝や自分如き者は唯御慈悲一つで助けて貰ふのであると御相續致し、又信仰の人國元より來りて、御慈悲の御話し懇々致され候、御慈悲なるかな、彼曰く私は何も知らん、此身體は親に任し、後生の一大事は阿彌陀様に御任せ申すと云ふて、細くも御念佛を喜び居り誠に嬉しく難有存候。其後何かの話には極重惡人の御文を唱へては御稱名致し居り候、幸に病氣の方も追々快くなり春暖の候に歸國致し候、夫より、年々冬は鎌倉、夏は近海と轉地致居り、宅に居る時は近くの寺院に參詣し、無我に細く御念佛の日送り致居候(尤も我儘懈怠の日送には候)然るに本年如來様の厚き御手廻しにより、

幸なる哉先生の御來臨を賜り、一同深き御録に遇せて頂き候後、彼曰く己れは、此頃の風邪を引かねば疾に濱へ轉地したのであるが風邪を引いた斗りて、近角様の御話しを聞く事が出來た、是れも皆如來様の御方便だと嬉びて居りました、其後先生より賜りし「慧信尼公御遺狀を殊に喜び折々暗誦しては語り合ひ／＼して居りました。畢竟するに此身體は父母に任し未來は如來様が善き様にして下さる事と信じて喜び居りました。

臨終の様子

今冬も轉地する積りにて夫れ／＼準備せるに去る十一月中旬より兩親共に重き風邪に侵され病臥せしに、彼れ弱き身にて看護し居りしが、己れ又同じく風邪の身となり、始めは左程とも思ひ居らざりしに僅かの間に肺炎症に急變し、遂に四五日間にて不歸の客と相成り申候、傍らの者は左程とも思はざるに彼れ早く起つ能はざるを知り、是迄御世話に預りし人々様に忘恩を謝し、如來様と御珠數とを御願致したいと申すにより、直様御内佛の無上尊を枕頭に御伸せしに臥床の儘珠數を手にし、御繪像にたづさはり、暫時黙誦致しました、夫れより平生の聴聞について御話しせしに、彼れ曰く苦しくて御念佛は稱へられぬ、私は何もわからん、如來様より連れて行て貰ふのだと、父傍より汝は克く頂いて結構である、仕合せの身であると、彼れ曰く己れは親にほめられて御淨土參りをさせて頂く一番の仕合せであると、嗚呼苦しい、早く死たい／＼と、其に手次寺并に他の御僧御出てになり、言葉短かに御話しあり、傍の人曰く別に御尋ねする事はなきやと曰く何も

なしと、刻々に死期迫り一同御稱名の中に息絶へ申候。皆々今更ながら佛恩の不可思議なる事を喜び申候。南無阿彌陀佛。

十二月十九日

小林 權松
細貝 虎吉

拜啓永々御無音に打ち過ぎ申候、時下寒氣烈しく御座候處如何被遊居申候哉御伺申上候、下而私事は御影様を以て有り難き日暮しを續け居り申候間御安心下され度、時に愚痴が起り申候度毎に第九章の御教化が「其れだ／＼其のため如來永切の御苦勞もありつれ」と夢よりさめたる心地に御座候。求道は毎月有り難く拜見仕居り申候、鈴木龍司様とやらの御投稿有り難く拜讀仕り候につけても、人の身の上とは思はず、深く／＼益々如來様の攝取の御慈光にくまなきを感じ入り申候。

さて年末も間近に相成り四十四年と云ふたのしき來年も參る事に候へば卒業を待ちて六月早々御舎に入れていたゞく事かられしさ指折り數へて待ち居り申候。

今日第一學期試験終了仕り申候而、早速村田家を御訪ね申候處奥様のみ居られ申候て、又種々と信仰問題の事話頭に上りて先生上様の事どもかたりあひ申候。奥様も村田先生も近來甚だ靜隱に御座候、明後日はクリスマスに行て御招待まで蒙り申候。

四方の山河皆光あり、四圍の事物皆恩愛の色に染む、人は皆私を偶するに親切也、學友間に於てクリスト信者のドタマテズムは多少人の冷笑を受けられるれども、西村が御寺參り

して、地獄極樂の話しをさくを敢て不思議とする友人無之候、時々友人より地獄はあるか極樂はあるかと申され候折には「僕は御寺に参りて地獄極樂の話しをさくのが、西村の信仰だと思ふか、地獄極樂は佛教の城だと思ふて居るのか、誓願不思議にたすけられぬらせてと思ひ立つ心は教化の味、申す念佛は行ありかたい〜て寺よりかへりて勉學するは御恩報謝だ、主觀的に考へてくれ、信仰は説教にあらず、地獄極樂にあらず、實際問題也」と申し候へば「ソ〜カ」と急に語をかへて、とに角何か人間は信仰なくてはならんなど申すて友人有之候。私事は同輩のクリスチャンを評して志想の牢屋に入り候りと申候、信仰は結繩にあらずと申居候、且つクリスチャンはドクマテズムにあらずんば詢教者の血は清しと強て友人の反意を吐く事有之事を望見仕り候、然し私は敢てクリスチャンと反論するものには無之、友人の中にもクリスチャンの人を最もよく親しみ居申候、ある友人は西村は心が大きいのが、ダフル、ケアラクスターだろらかと評し候由承り申候。いづも其の時は信仰は志想の牢屋にては無之候と答へ居申候またある佛教信者と申す人は「何にも如来様だとか、何とか云ふて有難くもなければ、世の中もたのしいものではないけれどどうせ五十年の命だから、自ら満足して行く、因縁と明らかに、たのしみ暮しをするのは佛教の根本義ぢや」と申す事も承はり、之れは一種の歴込主義の信者と存じ申居候。近來また妙に私を買ひかぶる下級生の人出來仕り候て、以外の人より意外の質問などいたゞく事有之申候て、自ら省みて甚だ慚愧する事有之候。

みほど深く〜感謝致し居り候兒はただ父の慈愛に従ひて父の導き給ふ處へ参らんと存じ候先月半ば頃と覺え候が兒が在京中父よりの慈愛に充ちたる紙面に接し候これぞ今にして想へば父が辭世の辭にて候ひしなり「佛祖の爲両親の爲め自らの爲め身を大切にしていゝたすら勉強せよ父が病はさほど重くもなし心せずして勉強せよ此冬休も勉強の都合ならば歸省するにも及ばじ」と懇に永々と御教示被遊候あゝ何たる親切の御心に候や斯る書面に接し乍ら而も日夜怠慢にのみ過し、このあさましや斯くて何心なく過し居り候ひしが去る十五日晩急報に接し十六日早速急行列車に投じて歸省の途に付き申候一晝夜の旅程も宛ら千秋の思ひ漸く翌日着郷直ちに走りて父の病室に至れば重患の態實に豫想外に候ひき即刻病床に手をつきて歸つて参りましたと申上候へば父眼を開きて莞爾として笑ませ給ひ無言のまゝ、兒を打眺めさせられ満足の御様子にて再び眼を閉ぢさせられ候此時全く病苦を忘れさせられたるやうなりしがやがて病再び發して安眠し給ふ時も無く終に午後九時往生の素懷を遂げさせられ候打見れば病床の側に父が平素崇敬し給ひし阿彌陀如来の木像と繪像と安置せられてあり其側の衝立には袈裟衣念珠整然として掛けられてあり聞けば是れ父が病床に臥し給ひし以來自ら佛前に伺ひ候するを得ざれば斯くせよと命じて自ら佛參の志をあらはし給ひし由に候あゝ懐かしの至りや茲に終生兒の忘るべからざる一ことこそ候へ乍憚聞こし召し下され度候そは後より母に聞きしこと候に候が先日父より送り給ひし書面は實に雷ならぬものにて候ひけり父は既に十月初旬より病床につき給ひしが兒に其の

先は右寒氣御見舞旁々警言仕候、何分御機嫌よく御在遊はされ度年末の御申上げ候。

十二月二十四日

南无阿彌陀佛、南无阿彌陀佛、西村友次郎

謹啓先達而父死去の節は誠に懇篤叮嚀なる御吊悔の御芳翰に接し刺へ夥しき御香料を賜はり深く感激に堪へず候既に在京中父の病勢輕からざる趣は豫而承知致し居り候ひしかども斯くも早く示寂し給はんとは實に意外のことに候ひき今に及んで何をか申上候べきたゞ父が慈愛のそこひなく深かりしを思ひて感謝念佛するの外無之候兒が幼時より父の愛撫し給ひし事一方ならず兒の要求としいへば何事をも容れて拒み給ふと嘗て無之漸く長ずるに及んで兒が大學入學のことを志望するや無財無糧の小寺なるにも拘はらず直ちにそを容れ給ひて爾來あらゆる辛酸を嘗め學資の出途に苦慮し給ひ而も借財をは兒に遺すまじとの遺る瀬なき慈心より一層苦心し給ふを甚だしく身を盡くしみ心を盡くし只管兒が成業をのみ唯一の樂とし百苦毒中にあがりて而も苦を苦とし給はず斯くて兒も初めて漸く安堵して遊學し得るに至りたるに御座候今に於て回顧すれば我が父は少くとも兒にとりてはたゞ人に在らず候正しく阿彌陀如来の來化して兒を導き給ひしことと信じ申候曠却流轉のその間疑心深くして宗教としいへば空想とのみ思ひ込める兒の到底並の教化にては化すべからずと思召し自ら現身の佛陀を兒に示さんどて父となり漸く其機縁熟したれば今や淨土に還歸し給ひしものと永劫以來我が爲めの如来の御苦勞

由申送りては兒が勉學の障りとなれば決して其のことを報ずべからずとて堅く母にも弟にも命ぜられありし由に候然るに弟は誤りて予に其のこととなくほのめかし書き送り候ひし故兒は見舞の意もて父に大切にせられよと書信致し候へば父を見て「父の病氣なることを凌雲に誰が知らした」とて大に家内のものを責め給ひ「かくては凌雲は心配するに違なければ自ら筆をととりて凌雲に安心せしむるに若かず」とて直ちに硯筆をとらせられ弟にはランプを持たしめ母には眼鏡を掛けしめ看護者には滴る汗を拭はせつゝ、臥し乍ら書きをめ給ひしが病苦に堪へ難くて中途に一度休憩し湯を呑み更に筆を執りて漸く書き畢へ「これでよしこれさへ送れば凌雲も心配せまい」と恰も大書を遂げたるが如く歡びて再び安らかに臥し給ひし由に候斯くとも知らず東都にありて安閑と遊びしことの罪なりやあゝ斯く迄もして兒の爲めを思ひ給ひしは我が父なりけるか誠に慚愧の極みに存じ候斯く病苦を冒して書面を出されしは兒に對してのみかと思ひしにさはあらで平素父の教化を蒙りたる昵近の同行には一辭世の書を送り給ひ今や我が身は蓮如上人の愚老當年の夏頃より違例せしめて今に於て本復のすがたこれなしつゝには當年寒中には必ず往生の本懷を遂ぐべき條一定と思ひ侍べりと申されしに異らず此上はたゞ佛祖の御教に隨ひ奉りたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せを蒙りて信する外に別の仔細候はず御同行中念佛相續肝要のことに候」との意もて仰せられ候由に候されば遠近の同行父の訃に接して驚愕一方ならず自己の親を喪ひしが如く悲しみ葬送の道路に當りては老幼軒

親鸞聖人の信仰

人生と信仰

●第一章 人生問題と信仰 ●第二章 悲觀思想と信仰 ●第三章 倫理力行と信仰 ●第四章 犯罪心理と信仰 ●第五章 社會問題と信仰 ●第六章 國家秩序と信仰 ●第七章 世界宇宙と信仰 ●第八章 需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

懺悔錄 附録「歎異鈔」

本書は著者が實験の信味に基づき、古來求道者の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の経験に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舎城の悲劇に照し、又著者が實験を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を可憐懇切に詳述したり。蓋し之れ「懺悔錄」の名ある所以にして一讀入信の人少なからず。

訂正 增補 信仰之餘瀝

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の黒暗界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に此の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるる處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十一版を出すに及び、本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先きに第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として「予が信仰的實験」なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根柢は本書に於て明かならぬ。

定價七拾錢
小包料八錢
クロース綴

定價卅錢
郵稅四錢
珍美本

定價廿錢
郵稅貳錢
珍美本

定價卅錢
郵稅四錢
珍美本

近角常觀著作

施行用小冊子

信仰之餘瀝要略

定價五錢 郵稅二錢 部數に應じ充分割引す(但し四冊迄は) 本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を抜萃し、傳道用小冊本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

冠頭 唯唯 信信 鈔文 意鈔

定價七錢 郵稅三冊迄貳錢(部數に應じ充分割引す)

「唯唯鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯唯鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて参照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

東京市本郷區森川町一
振替口座一六六九六番 求道發行所

規定

本誌は毎月一回十五日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
回答を要せらるる方は相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	一六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十三年十一月十二日印刷
明治四十三年十二月三十日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所
(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

所行發道求 地番一町川森郷本市京東 番六九六六一京東座口替振 所込申

前號要目

求道

◎當に知る可し、本誓重願虚しからず

◎信仰の奥底

講話

◎自然と廻心

◎人生問題と信仰

告白

◎入信之経歴

雜錄

◎信仰問題の着眼點

◎朝鮮傳道所感

朝鮮基督教の排日觀

朝鮮教化と邦語

朝鮮開發と信仰

時局と十七憲法

◎時局と十七憲法

◎信仰書簡七章

時報

◎朝鮮傳道

鈴木龍司

近角常觀

近角常觀



求道第七卷第九號 明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十三年十二月三十日發行 (毎月一回十五日發行)

東京市本町三丁目一丁目八番地